

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成26（2014）年度 実施報告書

2015年3月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

はじめに

本報告書は「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－」（2010 年度～2014 年度）事業の平成 26（2014）年度の活動実績を取りまとめたものです。

2011 年度に発足した「共に生きる」スタディグループは登録者数が 160 名を超え、メンバーに向けて学内外の平和構築や国際協力関係の情報を提供するとともに、自主的な活動に関する発信を支援いたしました。2013 年度から正規科目「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」として開講することとなった国際調査（スタディツアー）は、バングラデシュとネパールにおいて総合的に国際協力について学び、交流し、体験するプログラムとして更なる充実に努めてまいりました。大学間連携イベントとして実施した合宿・ワークショップ活動や大学院生による国際調査研究は、様々な側面から平和構築と国際協力について学び、研究する人材育成の手法としての効果を示しました。公開セミナーでは、異文化との交流や平和構築とジェンダーに関心を寄せる学生、研究者、一般市民へ向けて情報発信を行い、グローバル化社会における大学の国際貢献の一端を担うことができたと自負いたしております。

本年度の活動報告書は、本実施報告書のほかに『「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」スタディツアー実施報告書』、『大学間連携イベント「国際協力ボランティアを知ろう」実施報告書』、『大学間連携イベント「平和構築とジェンダー」実施報告書』、『「平和構築分野における国際調査報告書」「女子教育・基礎教育分野における国際調査報告書』』の 4 冊を作成し、詳細な活動内容と成果を記録しました。合わせてご一読の上忌憚のないご意見を賜れば幸いです。

本事業の実施にご支援、ご協力を賜りました学内外の関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。今後も 5 年間の活動で得た平和構築のためのネットワークと人材育成にかかわる知見や成果を活用して更なる知の集積・発信と教育研究に取り組んでいきたいと存じます。引き続きのご協力をよろしくお願いいたします。

2015 年 3 月

国立大学法人 お茶の水女子大学
グローバル協力センター長 北林 春美

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成 26 (2014) 年度 実施報告書目次

はじめに

I .	事業の概要	5
II.	平成 26 (2014) 年度の活動	9
1 .	活動の概要	11
2 .	「共に生きる」スタディグループの活動	13
2 . 1	学生自主活動	13
2 . 2	微音祭 (大学祭) における展示・発表	17
2 . 3	セミナー	19
2 . 4	JICA インターンシップ・プログラムとフィールド・スタディ・プログラム	22
3 .	「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」	26
3 . 1	実施概要	26
3 . 2	スタディツアー参加学生アンケート	30
3 . 3	その他	34
4 .	大学間連携イベント	35
4 . 1	「平和構築とジェンダー」ワークショップ	35
4 . 2	「国際協力ボランティアを知ろう」	39
5 .	国際調査研究	45
5 . 1	平和構築・人間の安全保障分野	45
5 . 2	女子教育・基礎教育分野 (野々山基金事業)	45
5 . 3	採択者、調査内容一覧	46
6 .	国際協力機構 (JICA) 委託研修	47
6 . 1	JICA 地域別研修「中西部アフリカ幼児教育」	47
6 . 2	アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト (PEACE)	50
7 .	野々山基金による活動	51
7 . 1	アフガニスタン女性教員の短期研修	51
7 . 2	アフガニスタンへの絵本寄贈	53
7 . 3	公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 (SVA) アフガニスタン スタッフ来訪・セミナー	55
8 .	調査研究「平和構築とジェンダー主流化」	56
8 . 1	「平和構築とジェンダー主流化 NGO 能力強化研修」参加報告	56

8. 2	公開セミナー「平和構築におけるジェンダー主流化—NGO からの最新報告—」	59
9.	センター教員担当の全学共通科目	63
9. 1	全学共通科目「NPO 入門」、「NPO インターンシップ[実習]」	63
9. 2	全学共通科目「平和と共生実習」	66
9. 3	学内公開講座	67
10.	その他	69
10. 1	グローバル協力センター図書室利用状況	69
10. 2	ホームページを通じた情報発信	70
III.	資料	71

I．事業の概要

I. 事業の概要

【事業名】

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」

【事業期間】

平成 22（2010）年度から平成 26（2014）年度

【概要】

グローバル社会における平和構築を目指して、先進国および開発途上国の大学等との国際的ネットワークを創成する。このネットワークは、女性の役割を見据えた知的国際連携であり、先進国と途上国の大学等が共同して、途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト地域における女性と子どもへの支援の調査・研究と支援活動を行うとともに、ネットワークに基づく教育（人材育成）の実践の場とする。

【事業実施主体】

国際本部グローバル協力センターが主体となり、大学院人間文化創成科学研究科と連携して行う。

【目的・目標】

本事業は、現代のグローバル社会における最重要課題である開発途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト国・地域における女性と子どもへの支援を目指した、知的国際連携による教育・研究・社会貢献を目的とするものである。ポスト・コンフリクト国・地域を含む開発途上国では、女性は経済的・社会的弱者であり、中等・高等教育を受けることが非常に難しいのが現状である。

お茶の水女子大学は、大学の基本的な目標として「すべての女性とその年齢・国籍等にかかわらず、個々人の尊厳と権利を保障され、自由に自己の資質能力を開発し、知的欲求の促すままに自己自身の学びを深化させること」を掲げている（第 2 期中期目標・計画前文）。さらに、世界的女子大学の多くもまた、「自らの知見を世界の平和の為に使う」ことを建学の精神としている。本事業では、こうした世界的女子大学が持つ建学の理念を実現するために、女子大学が一つになって平和を築くための活動を行うことを目的とする。

本事業の取り組みは、お茶の水女子大学が拠点となり、日本および世界的女子大学とネットワーク（フォーラム）を形成し、大学の構成員（教職員、学生・大学院生、卒業生の組織）による大きなネットワークによって開発途上国の女性と子どもへの支援、紛争によ

って傷ついた女性と子どもへのサポートを行うものである。また、こうした活動は、大学の使命である教育・研究・社会貢献を活性化し、この分野の人材育成活動に資することが考えられている。

本事業を通じて、大学間国際連携に基づくグローバル社会における平和構築の知的ネットワークの形成と、これに基づく教育・研究活動システムの創成を目指す。

【必要性・緊急性】

現在、国際社会においては、ポスト・コンフリクト地域における緊急人道支援が喫緊の課題である。特に、傷つきやすい女性や子どもに対する人道支援は最重要課題であるにも関わらず、その研究や人材育成に関する高等教育機関の取り組みは非常に脆弱である。そこで、本学を拠点として、先進国の大学と開発途上国、特にポスト・コンフリクト地域の大学、国際機関等と知的連携を構築し、緊急人道支援とそのための人材育成を行うことは、現代の女子大学に求められる重要課題であり、緊急の課題でもある。

【独創性・新規性】

本取組は、本学が拠点となって女子の高等教育機関の国際的ネットワークを形成し、開発途上国およびポスト・コンフリクト地域における国際協力、緊急人道支援の教育・研究・実践を行うことを目指している。現在、高等教育機関が連携して、女性と子どもを対象とした国際的ネットワークによる支援事業および共同研究を展開している事例はない。それゆえ独創性および新規性を持った取り組みである。

【第2期中期目標及び中期計画との関連性】

第2期中期目標として、「世界各国・地域の国際機関・高等教育機関などと連携し、女性のエンパワーメントのための支援を強化拡充する」を掲げ、これに対応する中期計画として「開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業を強化充実する」および「国内外の女子大学と連携して、女性のエンパワーメントに関する支援事業に取り組む」を策定している。先進国、開発途上国の高等教育機関と連携して、本事業に取り組むことで、目標の達成が可能となる。

II. 平成 26（2014）年度の活動

II. 平成 26 (2014) 年度の活動

1. 活動の概要

本年度は、平成 23 (2011) 年度に設置された「共に生きる」スタディグループの活動の継続・拡大、「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」の充実、大学院生による平和構築と人間の安全保障にかかわる国際調査研究支援の拡充を図るとともに、平和構築と国際協力にかかわるセミナー、大学間連携イベント等を開催し教育と実践の融合に努めた。

実施状況

学内外の組織、専門家とのネットワークの構築と、それに基づく人材育成や情報発信として以下の活動を実施した。

- (1) 国際協力人材の養成に関して、昨年度に引き続き「共に生きる」スタディグループを組織し、学内外で開催される国連機関、JICA、学術団体等のセミナー・講演会の情報を提供し、関連専門知識の蓄積と共有に貢献するとともに、グループの登録者を中心に平和構築と開発に関する様々な活動等を実施した。
- (2) 平成 23 (2011) 年度から実施し平成 25 (2013) 年度に全学共通科目「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」として正規科目に位置づけた国際調査(スタディツアー) 現地調査をバングラデシュとネパールで実施し、開発途上国の大学、政府機関、国際援助組織との連携・協力による実践的知識の提供による教育の充実を図った。
- (3) 大学間連携事業として、青年海外協力隊候補生・帰国した元ボランティアとの交流を主眼とする「国際協力ボランティアを知ろう」、ジェンダーの基本概念と紛争下におけるジェンダーに基づく暴力の実態について知識を深める「平和構築とジェンダー」を実施し、国際開発と協力に関心をもつ他女子大学生との交流を深めた。
- (4) 全学共通科目「NPO 入門」・「NPO インターンシップ実習」の履修を通じて、学生に NPO に関する知識を蓄積させるとともに、国内の NPO にインターンとして派遣し、公益を目的とする団体における実務の経験の獲得を可能した。
- (5) 全学共通科目「平和と共生演習」を開設し、開発途上国の女性の生活向上のための参加型プロジェクト立案・評価手法をグループワークと討論によって習得させるとともに、開発援助にかかわる様々なステークホルダーの役割と協働の課題について理解を深めた。

開発途上国の女性と子どもに関する研究としては、学内外の研究者と協力して以下の活

動を行った。

- (1) 中西部アフリカ地域の幼児教育専門家研修（通算第9回）を通じて得られた途上国の教育に関する情報を分析するとともに効果的な研修方法について研究を行った。
- (2) アフガニスタンの大学女性教員2名を招聘し、生物学および化学のための応用数学について短期研修を実施し、その専門知識を増加させることでアフガニスタンにおける高等教育レベルでの女性支援を実施した。
- (3) 本学の大学院生が実施する国際調査研究を支援し、平和構築と人間の安全保障について学ぶ学生の調査研究の充実・深化を促進した。
- (4) アフガニスタンの子どもと教育の現状について、アフガン人講師（公益社団法人シャンティ国際ボランティア会アフガニスタン事務所スタッフ）によるセミナーを開催して、図書館事業モデルについて協議した。
- (5) アフガニスタンで図書館運動を継続するシャンティ国際ボランティア会と協力して、復興後の教育の普及と質の向上に取り組むアフガニスタンの子どものためのオリジナル絵本（ダリ語、パシュトゥ語）を作成し、同会が支援する学校図書館に配布することで、アフガニスタンの識字教育・基礎教育を支援した。
- (6) 女性・平和・安全保障に関する国連安全保障理事会決議1325号に基づく国別行動計画の策定プロセスとそのモニタリングについて調査研究を行い国別行動計画における市民社会の役割についてセミナーを開催して平和構築におけるジェンダー主流化について情報を発信した。

2. 「共に生きる」スタディグループの活動

「共に生きる」スタディグループは専攻や学年（大学院、学部）を超えて様々なバックグラウンドを持つお茶大生が知見を共有し、意見を交換することで平和構築や国際協力に関する知識を深め、発信し、行動する場となることを目指して平成 23（2011）年度に発足した。

2014 年 4 月に昨年度の活動報告を兼ねた説明会を 2 回実施し、新規メンバーの加入を呼びかけた。メーリングリストへの登録者は新規継続合わせて約 160 名以上に達し、1 年間に 130 件以上の学内・学外（国連、JICA、NGO 等を含む）のイベント情報を発信した。また、センターが実施する事業に参加した学生の報告を報告書として取りまとめるだけでなく、センターのホームページ上にも掲載し、学生の学びを発信した。

2. 1 学生自主活動

（1）「学内フェアトレードウィーク」実施学生報告

グローバル文化学環で国際協力を学ぶ 4 人が、学内でフェアトレード（以下 FT）商品を販売したいと思い立ち、フェアトレード商品の普及を目的に活動している本学の学生団体 FOOT の協力を得て本企画が実現しました。FT を行う NGO の委託を受け、約 12 種類の商品を 6 月 16～20 日のお昼休みに、お茶大図書館付近にて販売しました。

商品と協力 NGO は以下のとおりです。

- ・東ティモール産のコーヒー（Peace Winds Japan）
- ・ネパールカレーキット、有機クッキー（ネパリ・バザーロ）
- ・バングラデシュの女性によるペンケースやバッグなどの手工芸品（シャプラニール）

商品の販売による利益は、各 NGO に寄付しました。



販売した商品の一部



図書館前におけるフェアトレード商品販売

FT は、お買い物で楽しく国際貢献できる方法のひとつですが、日本ではフェアトレード・ショップや取扱店は未だ少数です。しかし、販売中に「FT 知っていますか？」と声掛けするとほとんどの人が YES と答えてくれました。また、「おいしかった」「ホームページもチェックしてまた買います」という声もあり、日本において更に FT が活性化する可能性を感じました。ご協力頂いたたくさんの皆様、ありがとうございました。

(文教育学部 3 年 齋藤 美咲)

(2) STUDY FOR TWO 2014 年度活動学生報告

・教科書販売 (4 月、10 月)

STUDY FOR TWO は、いらなくなった教科書を大学内で回収・販売し、その収益をラオスの教育支援に充てている団体で、お茶大支部は今年で発足から 3 年目です。4 月、10 月の教科書販売では計 19 万円の売り上げを記録しました。このうち 9 割の 17 万円をラオスの子どもたちの奨学金として寄付しました。

・教科書回収イベント (7 月、2015 年 2 月)

学期末に教科書の効率的な回収を目指し、1 冊につき 1 回福引ができるイベントを実施しました。

・留学生との交流イベント (5 月、12 月)

お茶大支部発足時から継続しているイベントです。留学生と日本人学生と一緒に料理を作ることで交流を深めることを目的としています。各イベントともに 20~30 人の参加がありました。

・微音祭出店 (11 月)

今年は SFT 単体で揚げたこ焼き、フライドポテトの販売を行いました。活動内容についてのクイズを出題したり、団体活動の周知にも努めました。

(生活科学部 2 年 柴崎 真衣)



福引イベント



教科書販売



留学生との交流イベント

(3) 書き損じハガキキャンペーン実施学生報告

これも、多様な国際協力の一つのカタチです。

回収した書き損じ・未使用の官製ハガキが郵便局で切手シートと交換され、それらを換金して戦争で傷ついたアフリカの子どもたちの心のケアプロジェクトに充てるという仕組みなのです。

私たちは、昨年秋から 3 月 31 日まで日本紛争予防センター（JCCP）が実施している書き損じハガキキャンペーンに、グローバル協力センターを通じて参加しました。JCCP とは、紛争の被害者を平和構築の担い手にすることを目標に掲げ、武力紛争により人々の生命・自由・機会が無条件に脅かされる状況を改善し、紛争の発生・再発を防ぐ取り組みを国内外で行う特定非営利活動法人です。



グローバル協力センター前にてハガキを回収

(参考：JCCP ホームページ)

きっかけは、グローバル協力センター前に掲示されていた JCCP のチラシです。年賀状シーズン間近だったことと、ハガキが学生にとっても身近な存在であることから、大学での回収を思い立ちました。

「共に生きるスタディグループ」のメーリングリスト、SNS、授業などで呼びかけをおこない、回収 BOX をグローバル協力センターと図書館入り口付近に設置し、12 月下旬から 1 月末まで行いました。

私たちにとってどうしても遠い地での出来事として捉えられがちな「紛争」。しかし、紛争によって傷ついた罪のない人々を思うと、彼らのために何か出来ないだろうか、と思う人は多いはずです。日常生活の中で学生が出来ることには限りがありますが、ゼロではあ

りません。紛争地の人々に思いを寄せ、支援に共感を持つ私たちの小さなアクションの積み重ねが形となって紛争地に届く。誰もが無理なく続けられるハガキ回収という支援の輪をこれからも広げていけたらと願っています。

キャンペーンに共感し、書き損じハガキを寄付してくださったみなさま、活動に理解を示してくださったグローバル協力センター、JCCPをはじめ、みなさまに感謝いたします。

(生活科学部 2 年 石川 文絵、文教育学部 2 年 山下 悠・内山 みどり)

2. 2 微音祭（大学祭）における展示・発表

2014 年 11 月 8 日（土）と 9 日（日）に開催された微音祭（学園祭）において、「国際共生社会論実習」スタディツアー参加者と、「共に生きる」スタディグループ有志によるゼミ発表が行われた。

（1）ネパールスタディツアー学生報告

8 月から 9 月にかけて 1 週間ネパールを訪れ、各自が設定したテーマに沿って考察を深めてきました。それぞれのテーマは、「女性と人身売買の現状」、「受刑者の子供が暮らす家 ECDC」、「保健衛生の現状と現地の状況」、「ネパールの予防接種 PHC の取り組み」、「ネパールの情報化」といった多岐に渡ります。これらのことを各々ポスターとスライドに纏めました。微音祭ではポスターを生協食堂に展



ゼミ発表の様子

示し、教室でスライドを用いて 30 分間の発表を行いました。両日ともに 15 人ほどの方が聞きに来られ、質疑応答では貴重なご意見も伺うことができました。実際に途上国向けの支援活動をされている方から、より大局的に途上国全体を見ることも大事だと指摘されました。また、他大学の学生などと交流してみてもどうか、といった提案も頂きました。報告会の準備するにあたり、帰国直後とはまた違った考えをもつようになり、より一層考えを深めたりすることができ、とても有意義なものとなりました。授業全体での取り組みはこれで最後ですが、ネパールでの経験を今後につなげ、これからも各自で活動して行こうと思える報告会になりました。

（理学部情報科学科 2 年 吉村 藤子）

（2）東ティモールスタディグループ学生報告

みなさん、こんにちは。突然ですが、東ティモールという国についてどのようなイメージをお持ちですか？最近までは、12 年前（2002 年）に独立した「世界一新しい国」と呼ばれていたもので、ニュースなどで目にすることも多かったかもしれません。しかし、まだまだ日本ではその存在がよく知られていないのではないのでしょうか。スタディツアーから帰国した私たちは、なんとか東ティモールの素晴らしさ、若い息吹を少しでも多くの人に伝えたいと思い、今回の発表を企画しました。東ティモールについてあまり知らない人でも気楽に聞いてもらえるように、まずは東ティモールの地理、人口などの概要、この国の大まかな歴史について紹介するスライドを作り、写真も交えながら説明しました。第二次世界大戦時には日本軍が一時進出、占領したことを話すと、半世紀以上も前から日本と関



パネル展示

わりのあった国であったことに驚く方もいらっしゃいました。その後、メンバー有志が関心を持って調査したそれぞれのテーマについて5分ほどでまとめました。今回のテーマは、食、コーヒー産業、言語です。食分野では、給食制度や現地の大学生への質問で分かった彼らの食生活と課題、そして市場について、コーヒー産業では、主要輸出品産目であるコーヒーの栽培、加工について、言語では、

多様な言語環境、公用語・実用語がもたらす複雑な事情についてお話しさせていただきました。両日とも熱心に話を聞いて下さる方々に恵まれ、発表後の質疑応答ではより深く知ろうとくださっているのを感じ、とても感動しました。これからも、実際に東ティモールへ行った者として、見聞したことやこの国の良さも含めて、どんどん発信していきたいと思います。

(文教育学部グローバル文化学環4年 笠 智遥)

2. 3 セミナー

2. 3. 1 公開セミナー「ユニセフの栄養事業と職員の仕事」

(1) 目的

世界の子どもたちの命と健康をまもるために設立され、開発途上国や紛争下の国々で事業を行っている国際連合児童基金（UNICEF）に勤務し、ネパールやエチオピアで栄養プログラム専門官として活躍された岡村恭子氏を講師に招き、途上国の子どもたちの栄養改善プログラムを担当するまでの経緯と、担当官としての具体的なお仕事の内容について伺い、途上国の栄養問題に関する国際協力の実務や国際機関の専門職としての業務について理解を深める。

(2) 講演題名

「ユニセフの栄養事業と職員の仕事」

(3) 開催日時

2014 年 7 月 25 日（金）16：40～18：00

(4) 開催場所

お茶の水女子大学 学生センター棟 3 階 308 室

(5) 参加者

11 名（学部生、大学院生、他大学の学生含む）

(6) 講師

岡村恭子氏（株式会社グローバル・リンク・マネジメントシニア研究員（元 UNICEF 職員））

(7) 概要

現在、開発コンサルタント会社で研究員として活躍される岡村氏に、ユニセフネパール事務所、東京事務所、エチオピア事務所で勤務された経験に基づき、栄養の分野に限らず必要とされる企画運営の方法や国際協力を行う上での心得をご紹介いただいた。プログラム担当官として事業運営の最終目標を固め、目標達成に向けてニーズに合わせたプロセスを進める方法をお話いただいた。国際協力の現場では専門性のみならずコミュニケーション力、交渉力、マネジメント力などの能力がプログラムの目的達成に求められることから、ただ一つの道（専門性）を追求するのではなく、目的意識をもち多様な経験を重ねて回り道をする方が国際協力のキャリアの近道になるということや、国際協力を行う上で、国連や政府機関で働くということは目標ではなく、自身の目的を実現する手段であるとのお話に、栄養という専門分野の内容にとどまらず、学生にはキャリアディベロップメントの参

考となるセミナーとなった。

2. 3. 2 学内セミナー「国際協力ボランティアからジェンダースペシャリストへ」

(1) 目的

大学間連携イベント「国際協力ボランティアを知ろう」の一環として、ジェンダー分野の JICA ボランティアとして活動した経験を有する講師の方からキャリア形成とジェンダーに関する国際協力について話を伺い、国際協力ボランティアや平和・開発とジェンダーについて理解を深める。

(2) 講演題名

「国際協力ボランティアからジェンダースペシャリストへ」

(3) 開催日時

2015 年 1 月 13 日（火）12：20～13：10

(4) 開催場所

お茶の水女子大学 学生センター棟 3 階 308 室

(5) 参加者

5 名（学部生）

(6) 講師

与那嶺涼子氏（(株)アルメック VPI 海外事業本部・総合企画部 コンサルタント）
ジェンダーコンサルタント。イギリスで「ジェンダーと開発と紛争」を学んだ後、おきな
わ女性財団勤務を経て、名桜大学・沖縄大学非常勤講師、沖縄県男女共同参画審議会委員
を歴任。2008 年から 2 年間、紛争直後のネパールで女性の人権 NGO で紛争被害者支援の
プロジェクトに従事。元内閣府国際平和協力本部（PKO）事務局研究員。2014 年より（株）
アルメック VPI に入社しカンボジアの JICA ジェンダー主流化事業に従事した。国連安保
理決議 1325 号日本版行動計画策定過程では主に PKO 派遣や「予防」の章を担当。

(7) 概要

学生ボランティアとしてインドのマザーテレサの家で活動し、JICA ボランティアとして
ネパールの女性の人権関係 NGO で紛争被害者支援プロジェクトに関わり、大学や内閣府国
際平和協力本部事務局を経て現在は民間コンサルタント会社のジェンダー専門家として国
際協力の場で活躍する与那嶺氏にキャリアや仕事についてお話を伺った。出身の沖縄から
イギリスに留学しジェンダー学を修め大学教員や研究員として活躍する一方、ネパールで

JICA ボランティアにも参加し、差別を受けている寡婦を支援し、帰国後はジェンダー分野の研修講師をされているとのことだった。こうした経験を通して、開発途上国で外部者として働く際の心構え、日本社会で女性として働く際の留意点など、ジェンダー専門家ならではの話を通して、国際協力で働くことについて考察することができた。

2. 4 JICA インターンシップ・プログラムとフィールド・スタディ・プログラム

2. 4. 1 JICA インターンシップ・プログラム（コンサルタント型）【グローバル人材育成プログラム】

JICA が実施する上記プログラムは、日本の政府開発援助（ODA）により日本の国際開発コンサルタントが開発途上国で実施する JICA 事業の現場で国際協力・開発援助に関心を有する大学生および大学院生に実務の機会を提供することによって将来開発の分野をはじめと国際社会で活躍しうる人材としての動機づけを狙うものである。平成 26（2014）年度は 2 回の募集がおこなわれ、本学から 2 名の学生が合格した。

（1）応募資格

日本の大学・大学院在籍者でインターンシップ開始時および終了時に日本国内に居住している者。応募時に満 20 歳以上で本国籍を有するもの。国際協力、開発援助に関心を有するもの。心身ともに健康で十分な語学能力（TOEIC 640 点、TOEFL iBT 61 点、PBT 500 点以上）を有するもの。

（2）配属先

一般社団法人海外コンサルティング協会加盟のコンサルティング会社から提示された海外援助プロジェクト

（3）費用

渡航費は自己負担、現地滞在中は JICA から国ごとに定められた補助がある。

（4）本学からの応募・内定者

- ① 文教育学部グローバル文化学環 3 年 加藤紗妃（6 月までチェコ留学）
（株）アルメック VPI（ベトナム）
- ② 文教育学部グローバル文化学環 4 年 牛留早亜彩（11 月までオーストラリア留学）
（株）エヌジェーエス・コンサルタンツ（ザンジバル）

2. 4. 2 JICA インターンシップ・プログラム報告（ベトナム）

氏名： 加藤 紗妃

所属： お茶の水女子大学 文教育学部 人間社会学科 グローバル文化学環 3 年

派遣期間： 2014 年 9 月 3 日～2014 年 9 月 28 日

派遣国・都市： ベトナム・ハノイ

受け入れ先企業名：株式会社 アルメック VPI

インターンとして行ったこと：

- ・ベトナム国ハノイ公共交通改善プロジェクトのイベントへの参加
- ・ノイバイ国際空港第二ターミナル建設視察同行
- ・ベトナムにおける少数民族との共存意識についての調査

感想：

インターンシップ開始時に立てた目標は、①開発コンサルタントについて理解を深めること、②専門分野外の方でも積極的にお話を聞き、視野を広げること、③専門分野での知識を深めること、の3つである。

受け入れ先であった(株)アルメック VPI は国内外において主に街づくりや公共交通インフラにおける開発コンサルティングを行っている企業で、東京に本社があるほか、マニラ、ハノイ、ジャカルタ、ウランバートルにも支社を持つ。私が派遣されたハノイ支社では当時、都市鉄道の建設や公共バスの交通改善プロジェクトなどを行っていた。開発コンサルタントや当時の仕事内容については最初にブリーフィングがあり、概要を教えていただいた。また実際になにかイベントがあるときなどは同行させていただき、お手伝いをしながら実際にどのように仕事が進んでいくのか、どこと協力していくのかなどを理論だけではなく実際に見せていただけたため、理解が深まったと感じている。ハノイ市内バスの交通改善プロジェクトでは、想像していたよりも多くの日本のアクターが関わっていたことが驚きだった。1つのプロジェクトだけで完結ではなく、その次を見越し、現地の人のことを考えつつも日本の国益につながるようなプロジェクトの進め方を行うといった難しさとやりがいも感じた。また、建設中のノイバイ国際空港第二ターミナルへの視察にも同行させていただいた。日本の ODA の現場を見るのが初めてだったため、見るものも聞くことも新鮮であった。日本人同士でも様々なアクターの代表者が集まって仕事をしているため、それぞれの立場や考えがある中で協力して建設を進めており、それを間近で見て取れたのはとても興味深かった。

インターン中は会社の方について回るだけではなく、自分でテーマを決めて自分で調査をし、ベトナム・ハノイについて見識を深めてほしいという会社の方針に従い、「ベトナムにおける少数民族との共存意識の調査」というテーマを設定し、調査をすすめた。

まず最初にアンケートを実施した。対象はハノイ市街地にいるキン族（ベトナム人のおよそ 85%を占める多数派）の 20～60 代の男女で、アンケートの内容は①少数民族を知っているか、②どこで知ったのか、③少数民族に対してどう思うか、④少数民族の出身者に会ったことはあるか、の 4 つである。結果は 8 割弱の人が少数民族のことを知っていて、そのほとんどの人がプラスのイメージを少数民族についてもっている、というものだった。この多くの人があまり関わりのない少数民族に対してよいイメージをもっているという結果が私にとっては驚きで、では少数民族の方はキン族のことをどう思っているのかを知りたいと思い、実際に北部の少数民族の住む場所に行くことにした。

ガイドをしてくれた少数民族の人に話を聞くと、自分たちが迫害や不平等を受けている

という意識は感じず、マジョリティであるキン族をただ住んでいる場所が遠く、自分たちとは違う共同体に属している人たちである認識していると感じた。以上のアンケート調査とガイドさんの話から判断すると、ベトナムにおける少数民族とキン族との共存はうまくいっているのではないか、という考えに至った。次に、この結果や考えをどうとらえるべきかを専門家や現地で活動している NGO の方にお話を伺うことにした。

実際に専門家の方々にお話を伺うと、アンケートの結果の信用性について疑問があることで、良いイメージを答えたのはインタビューアが外国人の私であるからであって、本当の心理はなかなか見えづらいとのことだった。少数民族とキン族はお互いに憎しみを抱いていると話してくれた専門家もいた。

そういったお話から、少数民族地域の教育がまだいきわたっていないことがすべての問題の一因なのではないかという考えに至った。初等教育の浸透途中の地域では、ベトナム語を話すこともままならず、ほかの民族とも満足にコミュニケーションがとれないまま農業に従事するしか選択肢のない人生を送らなければならない。その弊害としてあげられるのは、自分の意見を主張できないことである。他民族との間になにか不満があっても、言葉がわからなければ自分の意見を主張することができず、問題の解決に近づかない。よって、初等教育が浸透し、自分の言葉を守りつつもベトナム語を使える人を増やすために、地域の人や親にそういった教育を受けることのメリットを知ってもらうような場を設けることが必要だと感じた。以上が自分で決めたテーマにおける調査とその結果、そして自分なりの提言である。

以上の自分の研究を中間、最終報告として会社の方に行い、フィードバックをいただいた。着眼点は面白いと評価されたものの、アンケートの質についてやはり疑問が残るということだった。自分自身もその点が少し心残りで、次に機会があったら、もっと質の良いアンケートをするために、過去に行われたアンケートを基にしたり、対象者の立場を分けたうえで、様々な階層の人にバランス良くアンケートをできるようにしたいと思う。

2. 4. 3 JICA フィールド・スタディ・プログラム

大学生が開発途上国での現地プログラム見学を通して、グローバルな視点と問題発見・解決能力を身につけ、国際協力や世界や日本の経済社会の開発・活性化において「グローバル人材」として将来活躍できるよう支援することを目的とする JICA フィールド・スタディ・プログラムの公募に本学から 2 名の学生が合格し、事前学習を経てインドネシアとカンボジアの国際協力プロジェクト見学を含むプログラムに参加した。

(1) 応募条件

- 日本に在住し、日本国籍を有する満 18 歳以上（2014 年募集開始日現在）

- 応募時に本邦大学(学校教育法に定める)の学部(在籍中(修士課程等は応募対象外))
- 指導教官等の推薦
- 健康上支障がなく、開発途上国における現地プログラムの全日程および、事前事後研修のすべてに参加できる
- 英語で日常生活においてどんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている
- 学部・専攻は問わない

3. 「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」

3. 1 実施概要

3. 1. 1 目的

専攻・学年を問わず開発途上国の社会・経済・政治にかかわる問題や国際協力に関心を有する学生（学部・大学院博士前期課程）が、開発途上国における研究・実践の実績を有する教員の指導の下で事前学習と現地調査（約1週間）を実施し、その成果をレポートにまとめて学内で発表することにより、文献を通じた学習とは異なる密度の濃い学習を行う。平成25（2013）年度から2単位の正規科目として実施している。

3. 1. 2 事前学習

説明会実施後、公開講演会を含む全8回の事前学習を通じ訪問国の社会経済や参加者の関心分野について学習した。また渡航前安全講習を一回実施した。

学内公開講演会「南アジアの社会・開発と女性」

日時：2014年7月5日（土）13:00～15:45

「バングラデシュの工業化とジェンダー」長田華子氏（茨城大学人文学部准教授・本学大学院卒業生）

「ネパールの社会・文化・女性と開発」田中雅子氏（上智大学総合グローバル学部准教授）

3. 1. 3 現地実習 バングラデシュスタディーツアー

（1）現地調査期間：2014年8月30日から9月6日まで8日間

（2）参加学生：8名

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	計
1	2	0	2	4
2	0	0	1	1
3	2	0	0	2
4	1	0	0	1
博士前期課程	0	0	0	0

（3）引率者：北林春美准教授、福井美穂特任講師

（4）プログラム概要

見学実習先は3つのアクターで構成されており、世界最大級の国際NGOであるBRAC、

日系縫製工場、そして JICA である。第一に BRAC 本部での概要講義の後、ノンフォーマル教育事業、貧困対策を目的とするマイクロファイナンス事業、コミュニティ能力強化事業、生計向上事業の見学を行った。第二に日系縫製工場では、ジェンダーと労働環境を中心に概要説明、製造ライン見学、バングラデシュ人従業員のインタビューを行った。第三に JICA バングラデシュ事務所において政治、経済状況と、政府開発援助（ODA）等について講義を受け、ごみ処理システム、障がい者教育支援の現場を青年海外協力隊員による案内で見学を行い、交流を行った。

(5) 調査日程

8 月 30 日 (土)	羽田空港発 バンコク着 TG661 バンコク発 ダッカ着 (シャージャラル国際空港) TG321
8 月 31 日 (日)	【BRAC 事業見学一日目】 BRAC 本部集合 Korail 地区ノンフォーマル教育プログラム (小学校) 見学 「BRAC 事業概要」講義 (BRAC 本部) 【国会議事堂見学】
9 月 1 日 (月)	【BRAC 事業見学二日目】 BRAC マニクガンジ事務所到着 マイクロファイナンス (Dabi) プログラム組合集会见学 コミュニティ・エンパワーメント・プログラム集会见学 BRAC マニクガンジ職員との懇談 (マニクガンジ事務所・昼食) アイーシャ・アベッド財団見学 【独立記念公園見学】
9 月 2 日 (火)	【日系縫製工場見学】 日系縫製工場概要説明 工員の方のインタビュー 工場内製造ライン見学 【アーロンショップ見学】
9 月 3 日 (水)	【JICA 事業見学一日目】 JICA 事務所にて青年海外協力隊員と顔合わせ 「ごみ処理事業概要」説明 (JICA 事務所) ボナニ市場、リサイクル業者、ナトゥンバザール収集現場見学・訪問 青年海外協力隊員 (環境教育) との懇談 (昼食) アミンバザール最終処分場見学
9 月 4 日 (木)	【JICA 事業見学二日目】 「バングラデシュの開発と日本の ODA」講義 (JICA 事務所) 「JICA の障害者支援協力と BMIS 概要」講義 (同上) BMIS (Baptist Mission Integrated School) にて昼食 (盲学校給食) 盲学校見学・生徒との交流

	【グラミンユニクロショップ見学】
9月5日（金）	ダッカ発 バンコク着 TG322 バンコク発 TG682
9月6日（土）	羽田着



BRAC マイクロファイナンス事業の村で自己紹介をする参加学生



JICA ごみ処理事業見学

3. 1. 4 現地実習 ネパールスタディツアー

（1）現地調査期間： 2014年8月30日から9月6日まで8日間

（2）参加学生： 7名

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	計
1	0	0	0	0
2	2	1	2	5
3	2	0	0	2
4	0	0	0	0
博士前期課程	0	0	0	0

（3）引率者： 榊原洋一教授、駒田千晶 AA

（4）プログラム概要

カトマンズ市の PHC (Primary Health Center)、CMDC (Children's Medical Diagnosis Center) といった医療施設では、公衆衛生サービスについて概要説明、見学、インタビューを行った。また現地女性が立ち上げたローカル NGO である、SERC (Special Education and Rehabilitation Center for Disabled Children)、WEPCO (Women Environment Preservation Committee) Nepal、Maiti Nepal、ECDC (Early Childhood Development Center) を訪問し、概要説明、見学、インタビューを通じ、障がい者教育支援、環境活動、

性被害に遭った女性支援活動、また服役中の受刑者の子ども支援活動からネパールの抱える様々な問題やニーズへの理解を深めた。SERC では実際にクラスで子どもたちとの交流を行い、活動内容やスタッフの抱える課題など体感することが出来た。特に PHC、Maiti Nepal、ECDC では、少人数（3 名、4 名）での訪問見学であったため、きめ細かにインタビューする機会を得た。これらの交流を通じ、ネパールにおける女性リーダーの理念や生き方に刺激を受ける機会ともなった。

（５）調査日程

8 月 30 日（土）	羽田空港発 バンコク着 TG661 バンコク発 カトマンズ着 TG319 Dr. Narayan によるオリエンテーション
8 月 31 日（日）	Muhan Heakth Cooperative Ltd., Durga Bhawani Polyclinic 訪問 Dr. Narayan 講義「ネパールの医療、女性と子どもの現状」 CMD(CChildren's Medical Diagnosis Center)訪問 Changu Narayan Temple & Bhakutapur 見学 一日の振返り
9 月 1 日（月）	Maiti Nepal 訪問（Group A） Chalnakhel Primary Health Center Kathmandu 訪問（Group B） 一日の振返り
9 月 2 日（火）	SERC(Special Education and Rehabilitation Center for Disabled Children)訪問 （Group A & B） 一日の振返り
9 月 3 日（水）	Chalnakhel Primary Health Center Kathmandu 訪問（Group A） ECDC(Early Childhood Education Center)訪問（Group B） 一日の振返り
9 月 4 日（木）	WEPCO(Women Environment Preservation Committee) Nepal 訪問（Group A & B） Kathmandu Durbar Square 見学 グループ別学習成果発表会
9 月 5 日（金）	カトマンズ発 バンコク着 TG320 バンコク発 TG640
9 月 6 日（土）	成田空港着



SERC で午後のプログラムに参加する学生たち



WEPCO Nepal ごみ処理事業見学

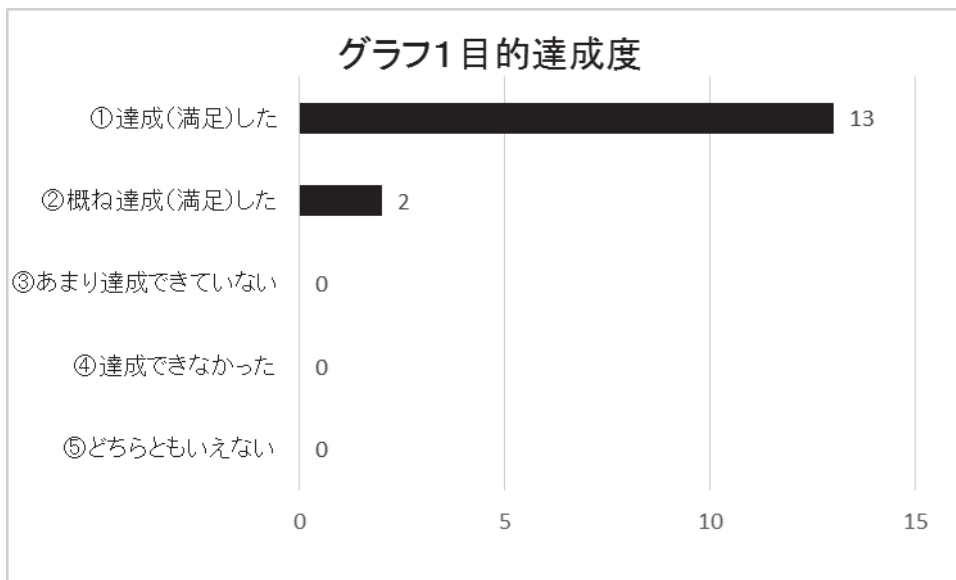
3. 1. 5 事後学習

- ◆ グローバル協力センターホームページに記事を掲載
- ◆ 報告会発表 10月15日（水）16:40～18:10（本館 209 室）
- ◆ 徽音祭におけるポスター作成・発表 11月8日（土）・9日（日）
- ◆ 報告書の作成・印刷・ホームページ上での公開

3. 2 スタディツアー参加学生アンケート

スタディツアー終了後に参加学生 18 名に対して、参加満足度や参加経験を今後どのように活かしていく予定かどうかに関するアンケートを行い、以下はその集計結果である。

Q.1 本スタディツアーで目的は達成できたか。



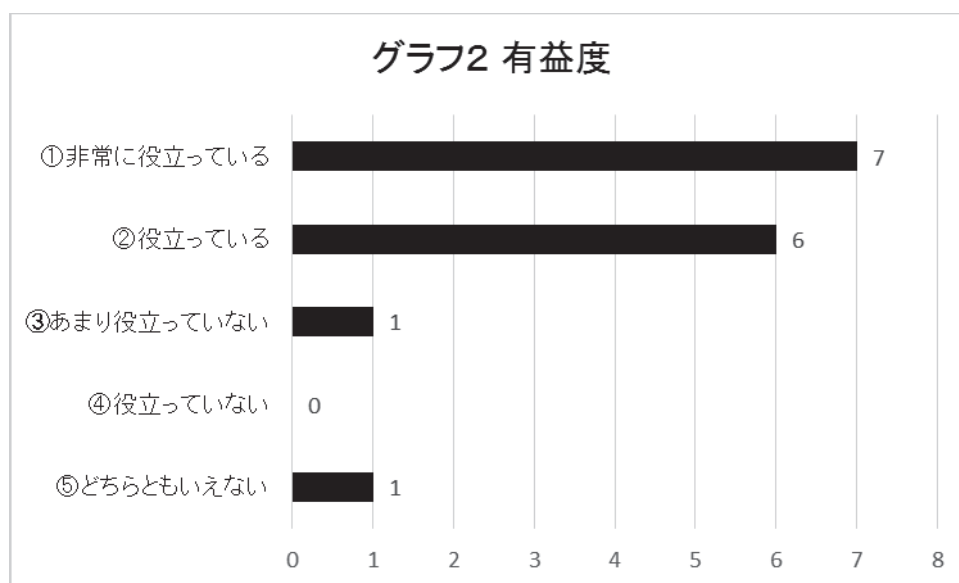
学生コメント

- ◆ 実際に訪れてこそ得られた発見がたくさんあり、現地の問題を自分の身近に感じることができ、また視野が広がり新しいものの見方を得られたから。
- ◆ 事前学習以上のことを数多く学べたから。
- ◆ 授業ではなく実践として英語を使用し、コミュニケーションをとることができたため。
- ◆ 現地の人々との会話を通して文献では知ることのできなかった情報や生の声を聞くことができたため。
- ◆ 現地に来て初めて気づくことや発見の連続で、見識が広がり新たなものの見方を得られたから。
- ◆ これまで、自分のものの考え方は上からであったり、現地の事情を押し量りきれていなかったりとミクロなものの見方が不足していたと感じていたため、今回の留学プログラムでどこか遠くに感じられていた物事を間近に見聞きし、密な議論を行うことで、

考えの幅が広がったと感じられたから。

- ◆ 文献で学んだ状況と実際の状況を比較し、イメージが変わった。また、現地を訪れないとわからない新たな発見があったため。
- ◆ 実際に途上国を訪問して、現地の人々の様子や生活環境を身をもって実感することができ、今までの考え方を改めることができたため。
- ◆ 事前に学んだことを基に現状を知ることが出来たので。
- ◆ ネパールに行かなければできない経験ができた。
- ◆ 訪問した先々で毎回大量に質問でき、気になっていたことをほぼすべて納得することができた。
- ◆ 発展途上国の支援の難しさについて身を持って学ぶことができた。
- ◆ 実際に自分の足で行き目で見て感じることで、今までは知ることができなかったことを得ることができたから。
- ◆ 異文化に触れ、その中で生活することができた。
- ◆ 様々な施設を見学したことによって、今後の自分の学習の方向性が定まってきたと感じたから。

Q2. 本スタディツアーによる経験が、学業、就職活動等に役立っているのか。



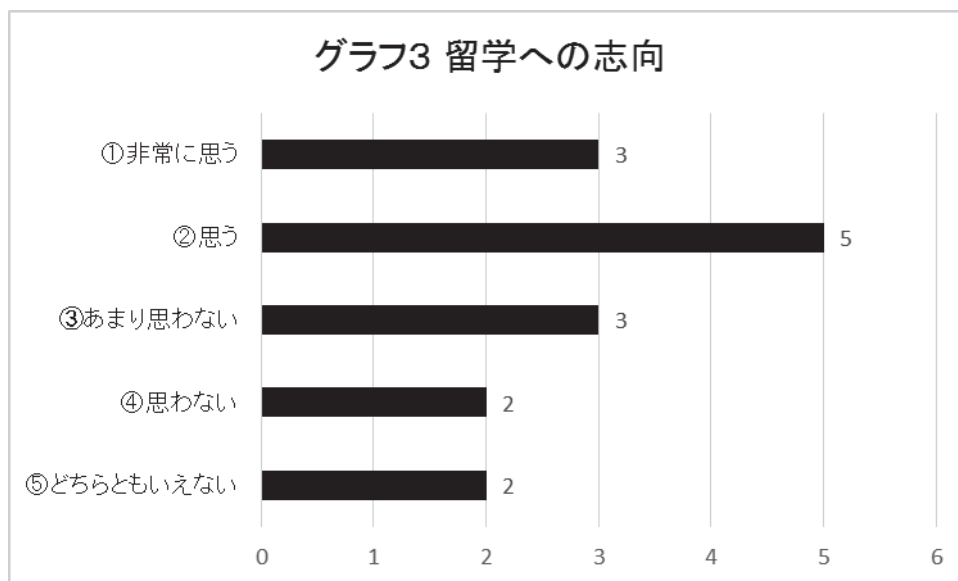
学生コメント

- ◆ 学びたい分野や興味関心の幅が広がり、2年次のコース選択の良い材料になったため。また進路について考え直すことができ、自分の将来について視野が広がった。
- ◆ 学業面では、新しい視点から興味のある分野を捉えなおすことが出来て、非常に役立った。しかし、就職活動にどう反映されるかは不明。
- ◆ 現地で直接様々なことを経験することで見聞や興味の幅が広がり、また学習意欲も高

まったため。

- ◆ 留学を通して見聞が広がり、自分の将来の選択肢を増やすことができたため。
- ◆ 新たな学問的関心領域が広がったため。
- ◆ 学業においては、各種論文などを読んで批判的な視点でばかり物事をとらえていた自分にとって、実際に活動の熱気に触れることで新たな視点を得ることが出来、非常に有意義な体験をしたと感じている。ただ、就職活動においてこの活動への参加がどれだけのアドバンテージとなるのかは未知数と感じる。企業の求めるものが何であるか未知数であるから。
- ◆ 授業で学んだことが実感として理解が深まり、視野や考え方が広がったため。
- ◆ 現地に入ることでは得られない体感としての知識や、人々の様子を知ることができ、途上国全体に対する考え方も改めることができたため。
- ◆ 研究分野につながるため。
- ◆ ネパールの生活文化を学べたため。
- ◆ 実際にこのような発展途上の国の実情を知ることができ、何が本当に必要とされているのかがわかり、そのようなことを踏まえて研究開発に貢献したいと思った。
- ◆ 現地に行って現地の人と会うことでしかわからないことが得られたと思うから。
- ◆ 素晴らしい方々とお会いすることができて自分の考えやすべきことが改めて分かったから。
- ◆ 卒業研究の指針を絞るきっかけになった。
- ◆ 特別支援教育等、様々な子供への教育の在り方について考える良いきっかけとなり、今後もそのことについて考えていきたいと思ったから。

Q3. 本スタディツアーを経て、より長期の留学をしたいと思うか。



学生コメント

- ◆ 長期留学に比べると、短期ではどうしても可能なことや得られることも限られてきてしまう。自分で現地を訪問し体験することの重要性を実感したので、さまざまな問題をより自分の身近に感じることができるよう長期滞在してみたいと思った。
- ◆ 一週間だけでは新しく出た疑問を全て解決することは出来なかったため。ただ、金銭面や就職を考えて留学はじっくり計画したい。
- ◆ 長期留学は得られるものも多いとは思いますが、今後の進路や就職のことを考えると短期留学の方が時間的にも金銭的にも負担が少ないと思われるため。
- ◆ 1週間では現地でトラブルがあった場合、予定していた行程を達成することも、その予備日を設けることも困難であるため。
- ◆ 現地の魅力や開発途上国の持つ活気に触れると同時に、この国が持つ問題を自分の問題に近づけて考えられるようになったため。
- ◆ 早い段階でこのプログラムに参加することが出来ていれば、長期留学も視野に入れたと思う。ただ、そのように思うのは、やはり学年によるもの大きい。学部卒で社会人になりたいので、留学は考えられない。
- ◆ 短期だと学べることが限られてしまったり、予定の変更が難しいため。
- ◆ 短期間では大まかな雰囲気しかつかめないため、長期で現地に滞在し、人々の生活環境をもっと深く知りたいと考えたため。
- ◆ 今の所必要性を感じていないので。
- ◆ 今回は1週間だけであったので、表面的なことはだいぶわかってきたが、より深く知るためにはより長期間滞在しなければいけない。
- ◆ 一週間では学びきれないところもあったので。
- ◆ 日本でもできること、すべきことはあると思うから。
- ◆ 経済的理由による、金銭的理由のため。

アンケート総括

「本スタディツアーで目的は達成できたか」という問いに対して、達成した（13）、概ね達成した（2）を合わせて、全員が目的を達成したと感じていることが分かった。コメントにおいても、知見の拡がり、視座の変化、現地を知ることの重要性を挙げる声が多かった。「本スタディツアーによる経験が、学業、就職活動等に役立っているのか」という問いに対しては、87%の学生が、非常に役に立っている（7）または、役に立っている（6）と回答している。コメントとしては、2年次コース選択の役に立ったという声や、新たな学問領域に興味を広かった、また卒業研究の指針を絞るきっかけとなったという感想が挙げられた。「本スタディツアーを経て、より長期の留学をしたいと思うか」という問いに対しては、合わせて53%の学生が、非常に思う（3）また思う（5）と肯定的に答えている。一

方で、33%の学生があまり思わないまたは思わないと答えている。コメントとしては、長期滞在をしてみたいという声がある一方、金銭面の負担や就職活動への不安が要因としてあげられた。

3. 3 その他

実習実施にあたり、参加学生に対しては、今年度は本学からの支援に加えて、日本学生支援機構（JASSO）海外留学支援制度（短期派遣）による支援を活用した。

4. 大学間連携イベント

4. 1 「平和構築とジェンダー」ワークショップ

(1) 目的

ジェンダーの基本概念を正確に理解するとともに、アフリカの事例紹介を通じて紛争下におけるジェンダーに基づく暴力の実態について知識を深める。

(2) 開催日時・場所

2014年6月28日(土) 13:00～17:00・お茶の水女子大学本館103室

(3) 講師

認定NPO法人 日本紛争予防センター(JCCP)

石井由希子氏

笹生雪ブリジット氏

(4) プログラム

13:00～ グローバル協力センター長挨拶

アイスブレイキング・他己紹介

13:20～ 講義Ⅰ「アフリカの諺からみえてくるジェンダー」

講義Ⅱ「平和構築とは何か？」

14:20～ 休憩

14:35～ グループワークⅠ「紛争とジェンダー」

グループワークⅡ「紛争下のジェンダーに基づく暴力」

15:50～ 講義Ⅲ「紛争下のジェンダーに基づく暴力の被害者への支援：

ソマリアの事例」

ワークショップ振り返り／アンケート記入・提出

17:00 グローバル協力センター長挨拶

(5) 参加者

総数：27名

全体内訳：お茶の水女子大学8(2)、他大学女子大学19(4)*

他大学内訳：奈良女子大学3(2)、宮城学院女子大学2、創価大学5、

聖路加国際大学4(2)、上智大学3、津田塾大学1、

国際基督教大学1

* () 内は大学院生数

（６）概要

グローバル協力センター長による挨拶に始まり、JCCP 石井氏、笹生氏の自己紹介の後、学生が自分とペアになった人を紹介する他己紹介が行われた。続く 2 つの講義ではジェンダーと平和構築に関する基礎的知識が共有された。講義Ⅰ「アフリカの諺からみえてくるジェンダー」では、ウガンダ、ケニア、ソマリアといった国の文化背景と諺を通して伝統的なジェンダーについて理解を促進し、ジェンダー統計、また最近の法整備に関する理解を深めた。講義Ⅱ「平和構築とは何か？」では、紛争の概念とそれを予防・管理することを通じた平和構築に関する説明がなされた。

後半は参加学生を 5 グループに振り分け、2 つのグループワークを行った。Ⅰ「紛争とジェンダー」ではウガンダの少女の物語を事例として扱い、紛争中および紛争後の彼女の経験がジェンダーによって違うものなのかについて分析した。Ⅱ「紛争下のジェンダーに基づく暴力」においては、ジェンダーに基づく暴力が紛争下で発生しやすい原因を説明し、コンゴ民主共和国で性暴力被害を受けた男性の事例を扱い、個人・家族・社会のレベルでの短期的・中長期的な影響について話し合った。そして、JCCP によるソマリア人被害者支援事業「紛争下のジェンダーに基づく暴力の被害者への支援」の内容と手法、調整メカニズムや留意点について説明が行われた。ワークショップ全体の振り返りとしては、頭で理解したこと、心で感じたこと、そして行動を起こしたいことを話し合い、書き出すことで明示化を行い、個別には理解度アンケートを行った。

（７）成果

ウガンダ、ケニア、ソマリアそしてコンゴ民主共和国といった国の伝統的なジェンダー観やジェンダー統計、ジェンダーに関わる現在の法制度を学び、また紛争の定義、それを扱う予防・管理・解決、平和構築概念を理解した。こうした学問的な背景のみにとどまらず被害者の状況と必要な支援内容を、実際の被害者事例と、JCCP が実際に行っている被害者支援を通して理解した。参加者からは「様々なバックグラウンドを持つ人たちとの交流を楽しんだ」、「被害者支援事業の内容を知り、自分でも何かしようと刺激を受けた」などの感想があり、知識のみでない実際の行動につながるような知見を得ることが可能となった。出席者全員には、報告書の作成が義務付けられており、それをまとめた報告書を印刷しセンターホームページで公開した。

（８）評価（JCCP 評価報告より抜粋）

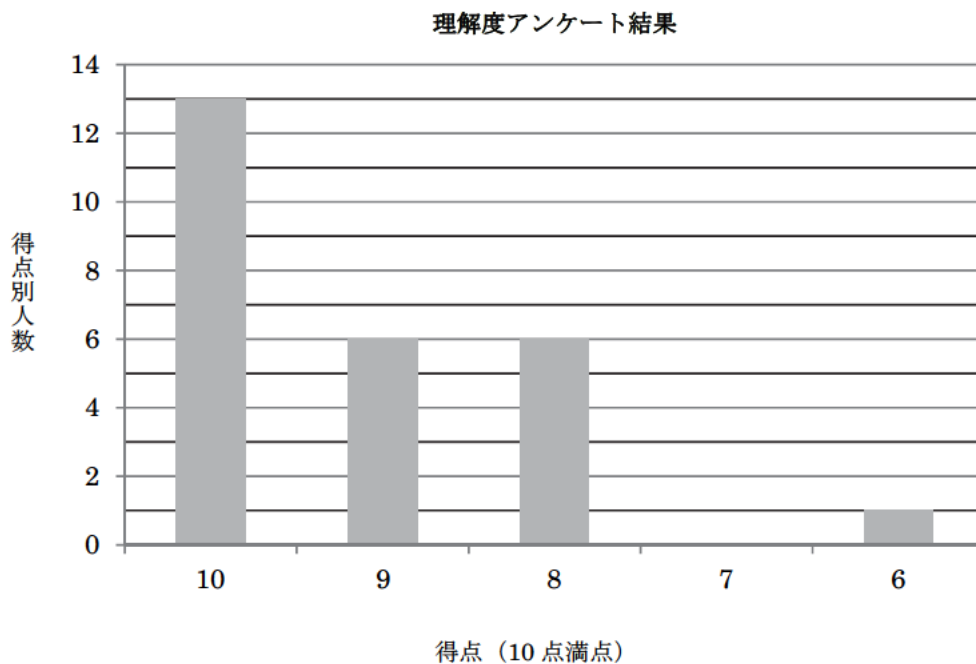
評価セッションでは、「頭で考えたこと」「心で感じたこと」「行動したいこと」の 3 つに分けて、参加者にワークショップ全体のフィードバックをしてもらった。

- 「頭で考えたこと」としては、紛争下で男性への性暴力が起きていることや男性被害者に特有の困難について学んだことで、ジェンダーに基づく暴力の複雑さに気づき、

被害者への多角的かつ戦略的な支援が必要であると考えた者が多かった。

- 「心で感じたこと」としては、ジェンダーに基づく暴力の深刻さや、被害者の精神的な苦痛に共感を寄せる者が多くみられた。一方で、男性と話し合って協力していく必要性を感じたり、実際の支援の難しさに悩みながらも何かをしたいと強く動機づけられたりした者も複数いた。
- 「行動したいこと」としては、SNS（Facebook、Twitter、ブログ等）や対話を通じて友人や知人に伝えたいという声が圧倒的多数を占めた。あわせて紛争解決やジェンダーに基づく暴力についてもっと知識を深めたい、という意見も多く見られた。また、現地訪問、ボランティアとしての貢献、キャンペーン等への協力を挙げる者もいた。

最後に理解度アンケートを 26 名に対して実施したところ、平均点は 9.15 点（10 点満点）となった。回答者のうち半数の 13 名は全問正解しており、正答率が低かった者は主に途中からの参加者であった。総じて今回のワークショップの内容は十分に理解されたと言える。





左上 北林グローバル協力センター長より開会挨拶

右上 講師の JCCP 石井氏より講義

左下 グループワークの様子

右下 会場全体の様子

4. 2 「国際協力ボランティアを知ろう」

(1) 目的

途上国に住み、社会の中で現地の人々とともに働く国際協力ボランティアの役割や、ボランティアになるために必要とされる資質、ボランティアの活動から得られるものについて理解を深める。また、東日本大震災後に様々なビジネスや情報発信を行う福島県の女性起業家のお話を伺う。

(2) 実施期間・場所

2015 年 2 月 12 日（木）～13 日（金）1 泊 2 日・JICA 二本松青年海外協力隊訓練所

(3) 講師

北野 一人氏 JICA 二本松青年海外協力隊訓練所 所長
田中 俊氏 元青年海外協力隊員 ウガンダ国派遣
佐藤 真奈氏 元青年海外協力隊員 バングラデシュ国派遣
日塔 マキ氏 株式会社 GIRLS LIFE LABO「女子の暮らしの研究所」代表

(4) 内容・プログラム

選考試験に合格してアジア、アフリカ諸国に派遣予定の青年海外協力隊候補者が訓練中の独立行政法人国際協力機構（JICA）二本松訓練所を訪問した。訓練所所長による JICA ボランティアの説明、ウガンダ、バングラデシュでの協力隊経験者 2 名による講義を受講し、ガーナ、モンゴルなどへ派遣予定の候補生名との意見交換を行った。

ボランティア経験者の方々からは、志望の動機、現地での具体的な活動の内容や異文化での生活・仕事で直面した困難や喜び、ボランティアとしての海外滞在の経験が帰国後どのように役立っているかについて具体的なエピソードを交えながらお話いただいた。

参加学生は講義やディスカッションから得た発見や感想をグループで取りまとめ、訓練所スタッフの前でプレゼンテーションを行った。

最後に（株）GIRLS LIFE LABO「女子の暮らしの研究所」日塔氏より、社会企業とし東日本大震災後に情報発信し、ビジネスを行っている活動について講義をいただいた。

(5) スケジュール

2 月 12 日	お茶の水女子大学 発
12 : 00	JICA 二本松青年海外協力隊訓練所（以下 JICA 二本松訓練所）着
12 : 30	昼食（JICA 二本松訓練所食堂）
13 : 30	JICA 二本松訓練所見学
14 : 00	講座「JICA 事業／JICA ボランティア事業概要」
15 : 00	JICA ボランティア経験者(元青年海外協力隊員)による講義とディスカッション

18 : 00	夕食 (JICA 二本松訓練所食堂)
19 : 10	派遣前の訓練生との交流
23 : 00	消灯
2 月 13 日	訓練体験参加「朝の集い」
7 : 10	朝食 (JICA 二本松訓練所食堂)
8 : 00	片づけ、荷物整理、退室 (チェックアウト)、部屋チェック
9 : 00	グループ・ミーティング、振り返りと学習成果発表
10 : 30	(株) GIRLS LIFE LABO「女子の暮らしの研究所」日塔氏講演
11 : 35	昼食 (JICA 二本松訓練所食堂)
12 : 30	荷物整理、挨拶等
13 : 00	JICA 二本松訓練所出発 お茶の水女子大学 着

(6) 参加者

お茶の水女子大学 9 名 (うちベトナムより交換留学生 1 名)

奈良女子大学 5 名 (うち大学院生 1 名)

宮城学院女子大学 5 名

引率 2 名 (グローバル協力センター北林准教授、福井特任講師)

参加者内訳

	お茶の水女子大学				奈良女子大学				宮城学院女子大学
学部 学年	文教	理学	生活	院	文学	生活環境	理学	院	学芸
1	5								2
2			2			3			3
3			1		1				
4									
留学生	1								
M1								1	
小計	6	0	3	0	1	3	0	1	5
合計	9				5				5

(7) 成果

1 日 5 時間の語学研修を中心とする 70 日間にわたる派遣前の訓練プログラム、規律や自主性を重んじる集団生活などを直接観察・体験し、候補生やボランティア経験者の方々の積極的な自己表現に参加者がやや圧倒された感もあった。2 日目のプレゼンテーションでは

グループごとになど最も印象に残ったことをテーマに発表し、訓練所スタッフからの講評をいただいた。最後に、福島県で社会起業家として活動する（株）GIRLS LIFE LABO「女子の暮らしの研究所」日塔氏より、東日本大震災後に福島に暮らす女性としての目線で発信し、ビジネスを行っている活動について講義をいただいた。

参加者からは国際協力に取り組む動機の多様性、異文化の中で現地の人々と共に働くための努力、海外活動の経験から得られる自分自身の成長や「海外で生活することによって便利さと引き換えに失われた心の豊かさに気づいた」という発言が心に残ったとの感想が寄せられた。参加者の報告は『大学間連携イベント「国際協力ボランティアを知ろう」実施報告書』にとりまとめた。

（８）イベント終了後参加学生アンケート集計結果

イベント終了後に、参加学生を対象に、イベント参加経緯と満足度や関心分野についてアンケートを配布し集計を行った。

本イベントを知った経緯としては、メーリングリスト、ポスター、大学関連部署や教員などからの直接の誘いと多様な方法でイベントを知ったことがわかる。本イベントに参加した理由としては、国際協力と JICA ボランティアへの関心が最も高く、次いで、国際協力に参加したい、東日本大震災関連 NGO のお話が聞きたいとの声が多かった。

本イベントの満足度は 19 名中 15 名が大変満足、4 名がほぼ満足と満足度の高いものであったことがわかる。開催時期・場所については、13 名が大変満足、5 名がほぼ満足であったが、他の学内イベントの開催が重複してしまったことへのコメントがあった。

関心分野としては、国際協力全般が最も高く 16 名、国際協力ボランティアが次いで 11 名と高かった。開発途上国の関心分野としては、具体的にジェンダー、教育問題、貧困など、教育、出版、水環境衛生、女性のエンパワメント、東南アジアでものづくり、人材育成などが挙げられた。

記述部分としては、「様々な面でいろいろなことをまなびとるところがあり、とても良かった。」「視野を広げる目的を果たせました。」など、具体的な国際協力ボランティアに関する知識に限らず、訓練生の国際協力ボランティアに対する姿勢などから多くを学ぶことができたことが伺える。

本イベントをどのように知りましたか（複数回答可）	計
学内メーリングリスト	5
ポスター等の掲示	7
大学の HP	1
大学関連部署・センター・担当教員などからの直接の誘い	6
友人・サークル仲間等の誘いまたは SNS 情報	4
その他（記述をお願いします。）	0

本イベントに参加した理由は何ですか（複数回答可）	計
国際協力に関心があるから。	15
JICA ボランティアに関心があるから。	14
国際協力に参加したいから。	10
JICA ボランティアに参加したいから。	4
東日本大震災関連 NGO のお話を聞きたいから。	9
JICA 二本松訓練所に行ってみたいから。	6
福島県に行ってみたいから。	6
その他	2

本イベントの参加満足度は	計
大変満足	15
ほぼ満足	4
あまり満足でない	0
改善してほしい	0

本イベントの開催場所・時期について教えてください	計
大変満足	13
ほぼ満足	5
あまり満足でない	0
改善してほしい	1

関心分野	計
国際協力全般	16
国際ボランティア	11
東日本大震災からの復興・ボランティア	6
開発途上国に関わること（記述をお願いします。）	9



田中氏（元青年海外協力隊員：派遣地・ウガンダ、職種・村落開発普及員）の講義



佐藤氏（元青年海外協力隊員：派遣地・バングラデシュ、職種・環境教育）の講義



訓練生との交流



朝の集いに参加



(株) GIRLS LIFE LABO「女子の暮らしの研究所」代表、日塔氏の講演



北野訓練所所長と記念撮影

5. 国際調査研究

平成 23（2011）年度から平成 25（2013）年度まで実施した本学大学院生による国際調査を公募し国際協力人材の育成と調査研究の充実を図った。今年度は、平和構築・人間の安全保障をテーマとする調査 3 件を採択・支援した。採択者から提出された調査報告書の詳細は、『「平和構築分野における国際調査」「女子教育・基礎教育分野における国際調査」』報告書を参照。

5. 1 平和構築・人間の安全保障分野

（1）対象分野

ポスト・コンフリクト地域の平和構築または開発途上国の人間の安全保障に資するテーマ・分野。

- ・ 女性、子どもの支援に関する分野、大学間の連携を促す目的の調査が望ましい。
- ・ 途上国のみならず、欧米諸国を拠点とする平和構築関連機関等の調査も可。
- ・ 2015 年 1 月 31 日までに終了する調査を対象とする。

（2）対象者

博士前期課程および後期課程に在籍する学生（休学中の者を除く）。

- ・ 本プログラムへの申請件数は 1 人につき 1 件。1 件につき支援可能な渡航回数は 1 回。
- ・ 平成 23 年度から平成 25 年度までに過去 2 回以上、本プログラムによる支援を受けた者は申請できない。応募者多数の場合は 1 回目の応募者を優先する。

5. 2 女子教育・基礎教育分野（野々山基金事業）

（1）対象分野

開発途上国の女子教育および基礎教育、ノンフォーマル教育に資する国際調査。

- ・ 開発途上国のみならず、欧米諸国を拠点とする女子教育関連機関等の調査も可。
- ・ 2015 年 1 月 31 日までに終了する調査を対象とする。

（2）対象者

博士前期課程および後期課程に在籍する学生（休学中のものを除く）。

- ・ 本プログラムへの申請件数は 1 人につき 1 件。1 件につき支援可能な渡航回数は 1 回。
- ・ 平成 23 年度から平成 25 年度までに過去 2 回以上、本プログラムによる支援を受けた者は申請できない。応募者多数の場合は 1 回目の応募者を優先する。

5. 3 採択者、調査内容一覧

【平和構築分野】

(1) 中村千鶴（人間文化創成科学研究科ジェンダー社会科学専攻 M2）

調査期間：2014 年 8 月 6 日～8 月 28 日

調査先：ルワンダ共和国

テーマ：ジェンダー・センシティブな視点からみたルワンダ・ガチャチャ裁判

(2) 柳沢あゆみ（人間文化創成科学研究科ライフサイエンス専攻 M1）

調査期間：2014 年 8 月 18 日～8 月 31 日

調査先：ルワンダ共和国

テーマ：ルワンダ東部農村地域における妊娠可能年齢女性の栄養状態と食物への
アクセス

(3) 佐藤香寿実（人間文化創成科学研究科ジェンダー社会科学専攻 M2）

調査期間：2014 年 8 月 30 日～9 月 28 日

調査先：フランス共和国

テーマ：フランス、アルザス地方におけるイスラーム空間の創出
ーストラスブール・大モスク建設を事例にー

【女子教育・基礎教育分野】

採択者なし

※報告書要約については「III. 資料」参照。

6. 国際協力機構（JICA）委託研修

6. 1 JICA 地域別研修「中西部アフリカ幼児教育」

お茶の水女子大学は、独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、中西部アフリカのセネガル、ガボン、カメルーン、ニジェール、ブルキナファソの 5 か国から 10 名の研修員を受け入れ、2014 年 9 月 29 日から 10 月 24 日まで幼児教育に関する研修を実施した。10 名の研修員はいずれも各国の幼児支援分野における行政官や視学官、指導主事など、指導的な立場の方で、平成 18（2006）年度の開始以来 9 年目の実施である。

サハラ以南アフリカにおいては、5 歳未満児の死亡率や栄養失調・疾病患率が非常に高く、早急に解決すべき問題となっている。国際社会においても、近年では、乳幼児期からの保護と教育を一体化させた総合的アプローチの重要性が認識され、幼児教育分野での途上国に対する支援体制が強化されてきた。しかし、サハラ以南アフリカでは、乳幼児の保護や教育に関する専門的人材は不足しているのが現状である。

そこでこの研修では、アフリカ地域の人材育成に資するべく、日本の幼児教育や保育、幼児に対する支援について、その制度・政策、保育内容・保育方法、人材育成、評価などに関して、講義や視察、ワークショップを実施した。これらを通じて幼児支援に関する研修員の知識や技能を向上させることを目標にした。研修後のアンケートでは、研修で掲げた 6 つの単元目標（①所属組織での問題点の発見・整理、②ECD[Early Childhood Development]の概念・内容・動向、③幼児教育における格差問題とその是正策、④子どもの発達に応じた適切な保育内容・保育方法・教材作成、⑤教員養成・研修のシステム、⑥幼児教育における評価）についていずれも高い達成度が示され、満足度も高かった。好評であった。研修最終日には、各研修員から帰国後の行動計画（アクションプラン）が発表された。研修員は帰国後、この行動計画に基づき、日本での研修の成果を自国で活用していくことになる。



指導主事の仕事についての講義



ワークショップで廃材を活用した手作りおもちゃを製作する研修員たち

研修日程(2014年)

日付	曜日	時間	内容	場所	講師
9月29日	月曜日	12:30-13:20	開講式	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	
		13:50-14:50	プログラムオリエンテーション	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	浜野隆(お茶の水女子大学)
		14:50-15:50	日本の幼児教育概要1(講義)	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	浜野隆(お茶の水女子大学)
9月30日	火曜日	10:00-12:30	日本の幼児教育概要2(講義)	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	浜野隆(お茶の水女子大学)
			インセプションレポート発表準備	JICA東京 SR102	
10月1日	水曜日	10:00-12:30	NGOによるECCD事業の経験と知見(講義)	お茶の水女子大学学生センター棟、第五会議室	利川豊(セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン)
		14:00-16:30	子どもの言葉を育む保育—その計画と実践(講義)	お茶の水女子大学学生センター棟、第五会議室	小山祥子(駒沢女子短期大学)
10月2日	木曜日	9:30-12:30	日本の幼児教育の理念と方法(視察)	お茶の水女子大学附属幼稚園	藤崎宏子・伊集院理子(お茶の水女子大学附属幼稚園)
			インセプションレポート発表準備	JICA東京 SR404	
10月3日	金曜日	9:00-16:00	インセプションレポート発表	JICA東京 SR 404	浜野隆(お茶の水女子大学)
10月4日	土曜日		休日		
10月5日	日曜日		浜松へ移動		
10月6日	月曜日	13:00-16:30	聖隷クリストファー大学訪問(挨拶)	聖隷クリストファー大学	小島操子(聖隷クリストファー大学)
			オリエンテーション	聖隷クリストファー大学	坪川紅美(幼児教育ネットワーク)
			学内施設見学(視察)	聖隷クリストファー大学	坪川紅美(幼児教育ネットワーク)
			ワークショップ1「教育委員会の指導主事の仕事」	聖隷クリストファー大学	内崎哲郎(浜松市教育センター)
			こども園見学	クリストファーこども園	太田雅子(クリストファーこども園)
10月7日	火曜日	9:30-11:00	幼稚園見学(子ども中心保育の実践)	浜松市立北浜東幼稚園	太田充代(浜松市立北浜東幼稚園)
		12:30-14:30	ワークショップ2「カリキュラムについて、子どもの主体性を大切に保育」	聖隷クリストファー大学	坪川紅美(幼児教育ネットワーク)
		15:00-16:30	保育所見学(障害児との統合保育)	ながかみ保育園	野村弘子(ながかみ保育園)
10月8日	水曜日	8:50-10:20	学生交流(親支援について)	聖隷クリストファー大学	坪川紅美(幼児教育ネットワーク)
		11:00-12:00	無認可保育園見学(認証保育園の実践)	家庭保育所マミー	鈴木美千代(家庭保育所マミー)
		13:00-15:00	ワークショップ3「質の高い幼児教育を作るためには」	聖隷クリストファー大学	坪川紅美(幼児教育ネットワーク)
10月9日	木曜日	14:00-17:00	子ども中心の保育・幼児教育(講義)	お茶の水女子大学学生センター棟、第五会議室	内田伸子(十文字学園女子大学)
10月10日	金曜日	10:00-11:00	NPOが取り組む被災地支援、病児の遊び支援成り立ち、など	東京おもちゃ美術館	馬場清(東京おもちゃ美術館)

		11:00-12:00	おもちゃと遊びのワークショップ	東京おもちゃ美術館	岡田哲也(東京おもちゃ美術館)
		13:30-15:00	乳幼児の発達と母子保健・衛生管理(講義)	お茶の水女子大学学生センター棟、第五会議室	榊原洋一(お茶の水女子大学)
10月11日	土曜日		休日		
10月12日	日曜日		休日		
10月13日	月曜日	10:00~17:00	遊びを通して学ぶ(ワークショップ・講義)	JICA東京 SR406	坪川紅美(幼児教育ネットワーク)
10月14日	火曜日		資料整理・自習		
10月15日	水曜日	10:00-12:00	館内見学・日本文化体験	東京おもちゃ美術館	星野太郎(東京おもちゃ美術館)
		13:00-14:10	手作りおもちゃワークショップ(身近な素材を使った手作りおもちゃを作ろう)	東京おもちゃ美術館	東京おもちゃ美術館
		14:20-15:50	わらべうたワークショップ	東京おもちゃ美術館	田村洋子(日本わらべうた協会)
		15:50-16:00	質疑応答	東京おもちゃ美術館	東京おもちゃ美術館
10月16日	木曜日	10:00-12:00	幼児教育と初等教育の連携(視察)	お茶の水女子大学附属小学校	佐々木泰子・神戸佳子(お茶の水女子大学附属小学校)
		13:30-17:00	ECDの概念と国際動向(講義)	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	三輪千明(倉敷市立短期大学)
10月17日	金曜日	10:00-12:30	幼児教育における評価:子どものQOL(講義)	お茶の水女子大学学生センター棟、第五会議室	松本聡子(お茶の水女子大学)
		13:30-16:00	振り返り・ディスカッション	お茶の水女子大学学生センター棟、第五会議室	浜野隆(お茶の水女子大学)
10月18日	土曜日		休日		
10月19日	日曜日		休日		
10月20日	月曜日	9:00-12:00	日本の幼児教育(視察)	東京学芸大学附属幼稚園	岩立京子・田代幸代(東京学芸大学附属幼稚園)
		午後	資料整理・自習		
10月21日	火曜日	10:00-12:30	子どもの健康(講義)	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	北林春美(お茶の水女子大学)
		13:30-16:00	振り返り・ディスカッション	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	浜野隆(お茶の水女子大学)
10月22日	水曜日		インテリムレポート準備	JICA東京 SR401	
10月23日	木曜日	9:30-17:00	インテリムレポート発表	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	浜野隆(お茶の水女子大学)
10月24日	金曜日	9:00-11:00	まとめ、テキスト共有、評価会、ファイナルレポートに向けて	JICA東京 SR401	浜野隆(お茶の水女子大学)
		11:00-12:00	閉講式	JICA東京	

6. 2 アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト (PEACE)

アフガニスタン政府が国造りの様々な課題についての具体的な政策方針を明らかにし、国際社会が支持を改めて示したカブール国際会議（2010年7月）において、当時の岡田外務大臣から工学、農学等の分野で最大 500 名のアフガニスタン人行政官を日本に受け入れ育成するというコミットメントがなされた。このコミットメントを踏まえて JICA とアフガニスタン政府との間で「未来への架け橋・中核人材プロジェクト」実施合意文書が 2011 年 2 月に署名され、アフガニスタンの行政官及び大学教員を日本国内の大学（修士課程等）への受入れが始まった。

JICA 支援による特別プログラム^{注)}の一環として参加した第 8 回日本電磁波エネルギー応用学会シンポジウム（11 月 17～18 日）において「アフガニスタンにおける植物からの精油抽出に関するマイクロ波技術の応用」の発表を行い、ベストポスター賞を受賞した。

注) 既存の大学授業や研究室での指導に加えて特定の目的達成や開発ニーズを踏まえた特別の活動を行うことによりさらなる効果の向上を目指して実施される付加的プログラム。

7. 野々山基金による活動

7. 1 アフガニスタン女性教員の短期研修

(1) 趣旨

2012年1月に設立された、本学卒業生の故野々山恵美子様からの遺贈を原資とする「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」の事業の一環として、同年に開始したアフガニスタンからの女性研修員の受入れを本年度も引き続き実施し、女子教育分野において国際貢献を行う活動を推進した。

3年目にあたる平成26(2014)年度は、アフガニスタン 大学女性教員2名(うち1名は国費留学生として本学で修士号を取得)を招聘し、森義仁教授(大学院人間文化創成科学研究科 自然・応用科学系)および由良敬教授(大学院人間文化創成科学研究科 自然・応用化学系)の下で専門分野の知識・教授法に関する短期研修を行った。

(2) 研修員

- 大学理学部生物学教員

本学在学期間：

理学部研究生

理学専攻博士前期課程修了

- 大学理学部数学教員

(3) 研究期間・スケジュール

- 2014年1月22日から31日まで(日本滞在は1月23日から30日まで)

スケジュール

月日	内容
1月22日(木)	カブール発—パキスタン経由
1月23日(金)	12:50 成田着 16:00 大学着 17:00 大塚宿舎着
1月24日(土) ～1月27日(火)	森義仁教授による研修
1月28日(水)	由良敬教授による研修
1月29日(木)	10:30「アフガニスタンにおける女性の生活と教育」、「アフガニスタンにおける子どもの教育」発表 11:20 閉講式 午後：帰国準備

1 月 30 日（金）	07：30 大塚宿舎出発 14：00 成田発（パキスタン経由）
1 月 31 日（土）	カブール着

（４）研修内容

・ **Mathematical Approaches to Biology and Chemistry** 「生物学および化学のための応用数学」（森教授および由良教授指導）

・ 「アフガニスタンにおける女性の生活と教育」、「アフガニスタンにおける子どもの教育」発表（1 月 29 日）学生、本学関係者が参加。

（５）成果

研修内容のとりまとめと、英語による発表を実施するとともに、アフガニスタンの女性および子どもの教育の現状について、本学学生も含めて議論し、情報交換をすることができ、研修員の満足度は高かった。

（６）その他

研修員の帰国に合わせて、大学の授業等で利用する 7 冊の参考書（英語）をカブール大学理学部生物学科・数学科に寄贈した。

7. 2 アフガニスタンへの絵本寄贈

国連が 2015 年 2 月 18 日に発表した報告書によると、アフガニスタンで 2014 年 1 年間に戦闘やテロに巻き込まれて死亡した民間人は 3,699 人で、国連が 2009 年に詳細な調査を始めて以来、最も多くなったとのことである。死傷者のうち子どもは前の年に比べて 40%、女性は 21% 増え、ともに過去最多となった。基礎教育レベルの就学率は男女とも過去 10 年間に大きく向上したが、政治的不安定と治安の悪化による影響が懸念される。

このような治安状況下で本学がアフガニスタンの学校や子どもたちを独自に支援することは難しいため、アフガニスタンで学校図書室事業を展開している公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA）に委託し、SVA の学校図書室推進事業の対象図書館や学校図書館で利用されるオリジナル絵本の作成を支援した。この支援は平成 24（2012）年度から実施している。

平成 26（2014）年度は、現地の作家による 11～14 歳向けのオリジナル・ストーリー「カメとイチジクの木」をダリ語とパシュトゥー語で各 1,200 冊印刷し、カブール州とナンガハル州の図書館・学校図書館に配布した（一部配布中）。



絵本の配布先施設と児童数

配布対象施設	数	児童数
ナンガハル州ジャラッラバード市内の小学校	23	60,232 人
ナンガハル州郡部の小学校	46	38,640 人
カブール州の小学校	5	15,764 人
ナンガハル州公共図書館	5	—
カブール国立図書館児童室	1	—

ナンガハル州ジャララバード市子ども図書館	1	—
----------------------	---	---

出所：SVA 業務完了報告書

SVA アフガニスタン事務所は、絵本が有効に活用されるよう、対象の小学校と図書館の教員や図書館員の育成研修を実施するとともに、州教育局指導主事とともに対象小学校を月に1回訪問して図書館活動のモニタリングを行うとともに移動図書館活動(読み聞かせ)を行っている。



完成した絵本「カメとイチジクの木」をもつ子供たち



カブール市小学校の図書室で読書する女子児童

7.3 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 (SVA) アフガニスタンスタッフ来訪・セミナー

(1) 講演会「アフガニスタンの子ども図書館活動」

2014年6月2日、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 (SVA) アフガニスタン事務所スタッフ を迎え「アフガニスタンの子ども図書館活動」と題する講演会を開催した。

内戦中はパキスタンの難民キャンプでの生活を余儀なくされた経験があり、現在は、SVA 図書館事業課職員として、カブール州を中心に移動図書館活動に従事し、SVA の支援で設置された学校図書館のモニタリングや先生方を対象とする研修に加え、カブール国立図書館の児童室の改善に携わっているとのことである。

日本の図書館活動の現場を視察したいとの要望があったため、センターが仲介し、講演に先立ってお茶の水女子大学附属小学校の図書コーナーおよび幼稚園を訪問し幼稚園では絵本の読み聞かせを見学した。また、センター教員が担当する「NPO インターンシップ」のインターン受け入れ組織で学童保育支援を行っている NPO 法人グランマ富士見台を訪問見学し子どもたちと交流した。

(2) アフガニスタン副所長来訪

2014年10月24日に公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 (SVA) アフガニスタン事務所副所長 の訪問があり、「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援野々山基金」の事業の一環としてセンターが SVA に委託している、アフガニスタンの子どもたちのためのオリジナル絵本「カメとイチジクの木」作成作業の進捗状況についての報告を受けた。当日は、本学 に留学している 2 名のアフガニスタン人大学院生も加わり、大統領選後のアフガニスタンの社会状況や今後の展望について意見交換を行った。アフガニスタンの未来のためには、女子への教育が重要であり、こども図書館活動は女子教育の充実にも貢献しているとのことで、グローバル協力センターでは引き続き図書館活動を支援して行く予定である。

アフガニスタンの現状についてお話を

8. 調査研究「平和構築とジェンダー主流化」

8. 1 「平和構築とジェンダー主流化 NGO 能力強化研修」研修参加報告

(1) 趣旨

平和構築におけるジェンダー主流化の一手法として、各国における国連安全保障理事会（以下、国連安保理）1325 号国別行動計画の報告・モニタリングに既存の女子差別撤廃条約一般勧告 30 号とその報告プロセスを活用することを学び、日本発の平和構築におけるジェンダー主流化への貢献を模索する。

(2) 参加研修名

紛争予防・紛争中・紛争後の状況における女性 国連安保理決議 1325 号 説明責任の枠組み-女子差別撤廃条約(CEDAW)一般勧告 30 号活用研修-

(3) 研修内容

女性・平和・安全保障課題に対応するため、紛争予防、紛争下、紛争後の女性課題における女子差別撤廃条約一般勧告 30 号の知識を広め、国連加盟国の、国連安保理決議 1325 号実施状況報告機能を強化する。紛争予防、紛争下、紛争後の女性課題に取り組む市民社会が、女子差別撤廃条約一般勧告 30 号の活用方法を伝達し、政府に対して国連安保理決議 1325 号および 1820 号および関連決議の効果的な実施を求められるよう、機能強化を図る。

(4) 研修実施月日：2014 年 12 月 15・16 日

(5) 研究実施場所：ジャカルタ（インドネシア）

(6) 主催

Global Network for Women and Peace(GNWP), The Asia Pacific Women's Alliance for Peace and Security (APWAPS), International Civil Society Action Network (ICAN), AMAN Indonesia, Cordiad, 国連ウィメン

(7) 参加国・人数

インドネシア、フィリピン、ネパール、インド、東ティモール、ミャンマー、キルギスタン、日本など（約 30 名）

(8) 参加組織（国毎）

Women in Governance(WinG)（インド）, Women Support Center（キルギスタン）, Women Peace Network Arakan, Justice for Woman（ミャンマー）, Saathi, Forum for Women Law

and Development, International Womens Rights Action Watch Asia Pacific (IWRAP AP) (ネパール), Women Engaged in Actions on 1325 (WE Act 1325) (フィリピン), Alola Foundation, APSE TL, Fokupers, Associacaon Chega Ba Ita (ACBIT) (東ティモール), KPKC, GKI Papua, インドネシア国立アルラニ・イスラム大学, LAPPAN, Kalimantan Women Alliance, 国連ウィメン インドネシア事務所 (インドネシア)、お茶の水女子大学グローバル協力センター (特任講師 福井美穂)

(9) 研修内容

12月15日(月)		
時間	内容	講師・担当
8:30-9:00	登録	AMAN 職員
9:00-9:05	歓迎の挨拶	Ruby Kholifa, Executive Director AMAN
9:05-9:10	開会の挨拶	Ita Fatia Nadia, UN Women Country Representative
9:10-9:30	導入：研修の目的	Mavic Cabrera-Balleza
9:30-9:45	休憩	
9:45-10:00	研修内容と期待される効果	Mavic Cabrera-Balleza
9:45-11:00	女子差別撤廃条約概要	Pramila Patten, CEDAW Expert and Chair of the Task Force on CEDAW GR 30
11:00-12:15	女子差別撤廃条約一般勧告30号と国連安保理決議1325号のおよび女性・平和・安全保障関連決議の関係	Pramila Patten & Mavic Cabrera-Balleza
12:15-13:15	国連安保理決議1325号国別計画と実施	Women Engaged in Actions on 1325-Phillipines, International Womens Rights Action Watch Asia Pacific-Nepal
13:15-14:15	昼食	
14:15-15:15	女子差別撤廃条約一般勧告30号の活用と国連安保理決議1325号の実施	Bondita Aharya & Helam Haokip, Women in Governance- India
15:15-16:15	女子差別撤廃条約仮報告書の作成手法と一般勧告 30 号の活用－国連安保理決議 1325 号と女性・平和・安全保障関連決議の説明責任を確保するための手法と戦略	Pramila Patten
16:15-16:30	休憩	
16:30-17:30	国別仮報告書の作成	参加者全員
12月16日(火)		
9:00-9:30	第一日目の振り返りと議論、ロジスティクス案内	参加者全員
9:30-11:00	仮報告書の国別発表	参加者全員
11:00-11:15	休憩	
11:15-12:30	女子差別撤廃条約の活用と女性・平和・安全保障課題のアドボカシーがいかにか	Pramila Patten
12:30-14:30	昼食	
14:30-15:30	閉会式 評価	Carla Natan, APWAPS member & Mavic Cabrera-Balleza
15:30-17:30	フォーカスグループ：国連安保理決議	Mavic Cabrera-Balleza, Kristine

	1325 号グローバルスタディのための市民社会調査	Lim Ang & Lea Valenti, Global Network of Women Peacebuilders
--	---------------------------	--

(10) 成果

アジア各国の市民社会の代表の参加を得て、現在、世界的に注目される国連安保理決議 1325 号また 1820 号の国内行動計画の策定および実施がいかに関国で行われているかを理解することができた。またそれを、さらに効果的なものとするために、女子差別撤廃条約一般勧告 30 号とそのモニタリング過程に連携することで、国際社会のモニタリングを各国の 1325 号国別行動計画実施強化へと結びつけることを学ぶことができた。

各国における平和構築におけるジェンダー主流化の手法について、市民社会の国際的な連携がその内容を後押しできるという一つの手法を共有し、またその現場で日本の 1325 号国別行動計画の実情を共有できたことも意義深い。また、アジア各国で同様の問題意識を持って活動する組織や人々とネットワークを構築することができた。



左から Cabrera-Balleza 氏、Kholifa 氏、Patten 氏



参加者によるグループ撮影



仮報告書作成ワークショップの様子

8. 2 公開セミナー「平和構築におけるジェンダー主流化ーNGO からの最新報告ー」

(1) 目的

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」事業の一環として、本学学生・教職員のみならず他大学生、市民を対象に幅広く紛争や災害等グローバルな問題を抱える世界の事情を踏まえて、「共に生きる」社会について考える。

(2) セミナー題名

「平和構築におけるジェンダー主流化ーNGO からの最新報告ー」

(3) 開催日時・場所

2015 年 1 月 13 日（火）18:00～19:00・お茶の水女子大学 学生センター棟 308 号室

(4) 参加者

16 名（本学学生 3 名、大学関係者 3 名、ほか一般の方々 10 名）

(5) プログラム

センター長挨拶

「国連安保理決議 1325 号とは」（福井美穂特任講師）

「日本版 NAP の策定過程」（本山央子氏）

「政府と NGO/CSO（市民社会の連携）：米国 NAP アカデミー参加報告」（与那嶺涼子氏）

「アジア各国の行動計画：インドネシア・ジェンダー主流化 NGO 強化研修参加報告」（福井美穂特任講師）

質疑応答

講師

・本山央子氏

1325NAP 市民連絡会コーディネーター。元アジア女性資料センター事務局長。神戸大学大学院で国際政治を研究。女性の人権と開発・平和に関する NGO のプロジェクトに携わる。主な著書・論文に「グローバルな戦争に抗する魔女の連帯一路上から暴力を問う Women in Black」（『世界』2004/1）など。2013 年より現職。

・与那嶺涼子氏

ジェンダーコンサルタント。イギリスで「ジェンダーと開発と紛争」を学んだ後、おきなわ女性財団勤務を経て、名桜大学・沖縄大学非常勤講師。沖縄県男女共同参画審議会委員。2008 年から 2 年間、紛争直後のネパールで女性の人権 NGO で紛争被害者支援のプロジェ

クトに従事。元内閣府国際平和協力本部（PKO）事務局研究員。2014 年より（株）アルメック VPI に入社しカンボジアの JICA ジェンダー主流化事業に従事した。日本版行動計画では主に PKO 派遣や「予防」の章を担当。

・福井美穂

お茶の水女子大学グローバル協力センター特任講師。イギリスで紛争解決を学んだ後、NGO 職員としてバルカン半島、南アジア・アフリカで緊急人道支援に携わり、現地で直面した紛争後のフェーズでのジェンダーに基づく暴力対策を研究テーマとする。2013 年 4 月より現職。日本版行動計画では主に「保護」「人道復興支援」の章を担当。

（6）概要

平和構築とジェンダー主流化日本版ガイドラインである国連安全保障理事会決議 1325 号（以下 1325 号）日本版の行動計画（National Action Plan: NAP）、「女性・平和・安全保障に関する行動計画」作成に携わる市民社会メンバーから最新の NGO の役割について報告をいただいた。

まず、「国連安保理決議 1325 号とは」としてグローバル協力センター福井特任講師が 1325 号の意義と内容を説明した。続いて「日本版 NAP の策定過程」と題して、1325 号 NAP 市民連絡会コーディネーター本山央子氏より、現在、日本政府が策定中の「女性・平和・安全保障に関する行動計画」と市民社会の役割に関する発表があった。2013 年から始まった同行動計画策定に合わせて市民社会側では国際協力やジェンダー分野の市民組織、学識経験者など有志からなる「1325 号 NAP 市民連絡会」が立ち上げられた。日本版行動計画の特徴として、参画を一つの柱とする全体構成や個々の指標の提案に関わった市民社会の役割の大きさと、内容が海外だけでなく国内政策もカバーし、自然災害を含んでいること、また女性の参画、保護を重視しながらも受益者に LGBT など多様性を含めたものとなっていること、他国と比較して指標のきめ細かさ、全関係府省庁を巻き込んだモニタリングなどが挙げられた。

次いで、「政府と NGO/CSO（市民社会）の連携：米国 NAP アカデミー参加報告」と題してジェンダーコンサルタント・（株）アルメック VPI 与那嶺涼子氏より、2014 年 12 月 3～5 日に、米国シンクタンク包括的安全保障研究所とジョージタウン大学主催で、米国ワシントン DC で行われた NAP アカデミーの参加報告が行われた。NAP アカデミーは、1325 号 NAP 策定、実施、見直しにおける好事例の共有を目的とし、アフガニスタン、インドネシア、ガーナなど世界 10 か国の政府・市民社会から約 50 名が参加した。開会イベントではヒラリー・クリントン元国務長官による基調講演の後、田中 JICA 理事長をはじめとするパネリストによるディスカッションが行われた。その後実施されたワークショップにおいては、1325 号 NAP の実施、評価、コミットメント、イノベーションに焦点を絞った

議論と、オランダ、カナダ、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの事例が共有された。指標が多すぎる場合に評価報告をどう工夫するのか、中間見直しをいかに行っていくのか、また計画実施のための財源をいかに確保するのかについて今後も議論が必要であると指摘もあった。

最後に、「アジア各国の行動計画：インドネシアにおけるジェンダー主流化 NGO 強化研修参加報告」と題して 2014 年 12 月 14・15 日にインドネシアのジャカルタで行われた国際 NGO・GNWP (Global Network for Women and Peace) などが主催する女子差別撤廃条約一般勧告 30 号 (CEDAW GR30ⁱ) 活用研修への参加報告を福井特任講師が行った。同研修は、1325 号 NAP 強化のために CEDAW GR30 を活用していくことを目的とし、フィリピン、ネパール、インド、東ティモールなどアジア 8 か国 20 団体 30 名ほどの市民組織が参加し開催された。GNWP 国際コーディネーター (Mavic Cabrera Balleza 氏) と国際人権法専門家・CEDAW GR30 作業部会長 (Pramila Patten 氏) を講師に、関連条約や決議の概要、人権条約の報告過程を 1325 号 NAP のモニタリングに活用する手法などの説明がなされた。研修は、フィリピン、フィリピン、ネパール、インドからの事例報告の後に仮報告書を各国ごとに作成・発表し、Patten 氏より講評を受ける形で行われた。

(7) 成果

各講師の発表の後、参加者から他国の 1325 号 NAP 予算や報告書、研修参加予算、GR30 の法的拘束力、先住民族に対する暴力、ジェンダー主流化に関する質問が出され、活発な議論が行われ、日本発信の平和構築におけるジェンダー主流化を考察する非常に良い機会となった。

参考文献

策定プロセスについて (外務省 URL) :

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/women/#section2>

「女性・平和・安全保障に関する行動計画」第二稿 (E gov URL) :

<http://search.e gov.go.jp/servlet/Public?CLASSNAME=PCMMSTDETAIL&id=350000106&Mode=0>



左から本山氏、福井特任講師、与那嶺氏



当日会場風景

ⁱ Convention on the Elimination of all Forms of Discrimination against Women
General Recommendation 30 (CEDAW GR30)

9. センター教員担当の全学共通科目

9. 1 全学共通講義「NPO 入門」、「NPO インターンシップ[実習]」

(1) 全学共通講義「NPO 入門」

【目的】

「NPO とは何か」を現場の活動に学びながら理解する。NPO による社会問題解決の方法をグループワークや企画書作成を通じて学び、自らの提案力、行動力を養う。

【概要】

NPO (Non Profit Organization、民間非営利団体)に関心が集まっているが、NPO は、政府（国や自治体）でも企業（営利団体）でもない、民間でありながら公共的な課題を担う市民の自主組織である。政府や企業だけでは解決できない社会問題、たとえば環境保護、福祉や子育て、貧困対策、まちづくり、国際協力、文化活動などに取り組んでいる。NPO を通して現代の社会問題を知り、解決の方向性をさぐるものである。そのため、NPO とは何か、また NPO の必要性、課題とともに考える。実際に活動している NPO 職員をゲストスピーカーとした講義を通して、NPO 活動の現状と課題を知る。「NPO のつくりかた・運営のしかた」をグループワークなども用いて学び、考える。自分が解決したい社会問題は何かを考え、自身が提案する NPO の事業計画を立案する。

全 15 回の講義の中で、貧困対策、保育支援、国際協力を分野とする 3 つの NPO からゲストスピーカーを招き、それぞれの専門分野での活動やその成り立ちと課題について講義をしていただいた。学生による発表は 2 回行われ、中間発表では、学生がそれぞれ選んだ NPO の活動報告または各国における NPO の状況を発表した。最終課題については、グループでそれぞれが選んだ分野の NPO および事業を立ち上げ、団体と活動報告を発表するといったものである。最終報告書は最終報告をまとめ、事業のより詳細な説明と学びを記述する。

【参加人数】 11 名

【成果】

NPO について聞いたことはあるが、その成り立ちや背景、そして実情については全く知識がないと言っていた学生たちが、講義、議論そして調査やグループワークを通して、NPO について知識を深め、最終的には自分たちの問題意識に沿った NPO の設立計画を立て、事業活動報告が可能になり、NPO が抱える課題を議論することもできるようになった。多く挙げられた感想としては、社会的な問題について、自分がどう関与することができるかわからなかったのが、その方法論を学ぶことができたというものだった。また、NPO で働く人々に実際に触れ合うことで、その熱意と情熱に触れて、それを職業とすることを選

んだ人々に会うことで、キャリアプランについて学ぶ部分もあったようである。

また、本講義は NPO インターンシップ実習前の必修科目であるが、講義を通じた知識を実習で確認することで、より正確かつ深い知識が得られるようになったとの相乗効果をあげる声もあった。

（２）全学共通講義 LA 生活世界の安全保障 23「NPO インターンシップ [実習]」

【目的】

1. NPO の実際の活動に参加し、その意義や役割、抱えている課題を具体的に学ぶ。
2. 社会活動の中で、大学での学習・研究の課題を発見する。
3. 将来にわたる社会と自分のかかわりを考えるきっかけにする。

【概要】

貧困対策、子育て支援、障害児教育支援、国際協力、環境保護などに取り組む NPO で実習する。NPO (Non Profit Organization : 非営利組織) は、政府 (国や自治体) でも企業 (営利組織) でもない、市民の自主組織である。政府や企業だけでは解決できないさまざまな課題に取り組んでおり、本実習を通じて受講生は協力団体である NPO で年間最低 60 時間のインターンシップ (体験就業) を行う。

受講生は、当初、NPO インターンシップ申込書、NPO インターンシップ実習生カード、志望理由書を提出し、実習用のメーリングリスト登録、保険に加入後、志望するインターンシップ先の団体で面接を行う。その後、目標管理シートを実習先と相談しながら準備し、実習を行いつつ、その内容を実習日誌に記録し、最終的には実習報告書とともに提出する。報告会は、中間報告会と最終報告会の 2 回に分かれておこなう。

【参加人数】 5 名

(所属 : 生活科学部 2 名、文教育学部 3 名)

(学年 : 1 年生 1 名、3 年生 3 名、4 年生 1 名)

【インターンシップ受け入れ団体】

自立サポートセンターもやい、グランマ富士見台、市民コンピュータコミュニケーション研究会、環境ネットワーク・文京

【成果と課題】

NPO とは何かをその活動の実体験を通して理解し、その課題を学ぶことに関しては全員が手ごたえを感じ、「NPO 入門」で得た知識を再確認する機会をもつことができた。今年度は、履修学生の多くが、既に参加したい団体を最初から決めていたこともあり、目的意識のはっきりした中で、実習を始められたことは良かったように思う。前年度と比較して

も、1年生の数が少なかったせいか、実習成果を卒業論文の一部として使用できた学生、また来年度には卒業テーマとして取り上げる予定の学生、実習内容と関係のある資格取得予定のある学生など、より各 NPO の持つ専門知識を生かせる実習となったのが今回の特徴である。

一方で、インターンシップ先での機材の破損といった事故もあり、事故そのものは故意でなくとも、トラブルの際にいかに真摯に対応することが大事かを学ぶ機会となった学生もいる。NPO 入門履修を通して、予備知識の導入はあるものの、社会人としての心構えなどは、実習を通して学ぶしかない面もあり、受け入れ NPO の方々との密な連携が大事であることを今年度も痛感した。

【最終報告会】NPO インターンシップ実習報告会

日時：2015 年 1 月 10 日（土）10：00～12：00

場所：大学本館 125 室＜第 2 講義室＞

内容： 開会あいさつ

学生実習報告（団体ごと/報告順）

環境ネットワーク・文京

グランマ富士見台

自立生活サポートセンター もやい

えこお

コメント（受け入れ先 NPO の皆さま）

閉会挨拶



学生発表



報告会にご出席いただいた NPO の皆さんと
履修学生

9. 2 全学共通科目「平和と共生演習」

開発途上国の女性(特に妊産婦)と子どもの健康の改善、死亡の削減は国際社会が取り組むべき重要な課題の一つであり、国連総会で採択されたミレニアム宣言においても途上国と先進国が協力していくことが合意されている。しかし、目標年の 2015 年を目前にして今なお国、貧富や居住地による健康水準の格差の縮小は十分に達成されていない。国際機関、援助国、NGO などが途上国の政府、地方自治体、住民組織、大学などと協力して様々な保健プロジェクトを実施している。

本コースでは、1) 途上国の女性と子どもの健康と、健康に影響を及ぼす様々な政治・社会・経済的要因と健康の改善に向けた取り組みを理解すること、2) 開発プロジェクトの立案・運営・評価手法である PCM (Project Cycle Management) 手法をケーススタディに基づく計画のシミュレーションを通じて理解することの 2 点を到達目標として講義、討論、実習を行った。

架空の途上国農村に住む妊娠中の女性の死亡を取り上げた WHO 作成の教育用ケース「Mrs. X は何故死んだのか? (Why did Mrs. X die? – retold)」のビデオ視聴とロールプレイング・ゲームによって女性の健康を取り巻く社会経済環境や様々な問題を理解し、PCM 手法を用いたワークショップを通じて現状分析を行い、農村コミュニティの中で妊産婦の健康向上を目的とするプロジェクトの計画立案を行った。計画立案プロセスの中では「住民参加型開発」、「ジェンダーと参加」、「ポジティブ・デヴィエンス・アプローチ」等について紹介した。

また、JICA 国際協力専門員として世界各地の母子保健プロジェクトに携わる外部講師の講演を通じて、インドネシアで実施された母子健康手帳普及プロジェクトについて、PCM 手法によって作成されたプロジェクトの枠組みや、国・地方レベルの関係者の役割、地方での実証事業から全国展開への移行など国際協力を巡る様々なステークホルダーとその協働のあり方について紹介していただいた。



ゲスト講師による講義

9. 3 学内公開講座

センター教員担当講座にてゲスト講師による以下の学内公開講座を実施した。これらの講義は当該の科目履修者だけでなく当該のテーマに興味を持つ本学関係者（学生、職員、附属高校生）の聴講を受け入れた。

（１）「NPO 入門」「NPO インターンシップ[実習]」

日時： 2014 年 5 月 19 日（月）13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館 301 室

テーマ：「NPO 法人自立生活サポートセンターもやいの活動紹介」

講師： 大西 連 氏（自立サポートセンターもやい理事長）

日時： 2014 年 5 月 26 日（月）13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館 301 室

テーマ：「NPO 法人グランマ富士見台の活動紹介」

講師： 浦辺 佐由美 氏（グランマ富士見台 理事）

日時： 2014 年 6 月 2 日（月）13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館 301 室

テーマ：「NPO 法人ピースウィンズ・ジャパンの活動紹介」

講師： 山本 理夏 氏（ピースウィンズ・ジャパン 緊急対応部長）

（２）国際協力特論（文教育学部）

日時： 2014 年 6 月 12 日（木）15：00～16：30

場所： お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館 2 階 204 室

テーマ：「製薬企業の国際協力とグローバル・ヘルスへの貢献」

講師： 水野 満氏（エーザイ株式会社グローバルアクセスストラテジー室）

日時： 2014 年 7 月 3 日（木）15：00～16：30

場所： お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館 2 階 204 室

テーマ：「災害と健康」

講師： 柳沢 香枝氏（国際協力機構（JICA）東・中央アジア部長、元国際緊急援助隊事務局 局長）

（３）平和と共生演習

日時： 2014 年 12 月 25 日（木）15：00～16：30

場所： お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館 404 室

テーマ：「母子の健康をまもる国際協力：母子手帳とプロジェクト」

講師： 尾崎 敬子氏（JICA 国際協力専門員）

（４）国際共生社会論実習

日時： 2014 年 7 月 5 日（土）13：00～15：45

場所： お茶の水女子大学 本館 1 階 125 室

タイトル・講師：

「バングラデシュの工業化とジェンダー」長田 華子氏（茨城大学人文学部准教授）

「ネパールの社会・文化・女性と開発」田中 雅子氏（上智大学総合グローバル学部准教授）

10. その他

10.1 グローバル協力センター図書室利用状況

グローバル協力センター図書室は平成 23（2011）年度に、センター室の一角に、グローバル協力センターの活動に資する図書資料を大学附属図書館に未所蔵の図書（主に社会科学分野）を中心に収集・貸出を開始した。センターが実施するイベント、スタディツアー、教員が担当する科目参考資料を中心に平和構築、開発、国際協力等のテーマの書籍の充実を図っている。2014 年 2 月現在蔵書数は 1088 冊で、年間約 200 冊の貸出利用がある。最も多い利用者は、文教育学部生で、1、2 年生の利用が多い。次いで、大学院生の利用が多い。予め OPAC で蔵書検索をし、来室している利用者が多数で、2014 年は蔵書検索 OPAC でグローバル協力センターに資料の所蔵確認をした附属高校生の利用が 1 件あった。理学部生の利用は募集期間を含む「国際共生社会論実習」（スタディツアー）の実施時期であった。

2011 年以降貸出回数の多い本は以下のとおりであった。

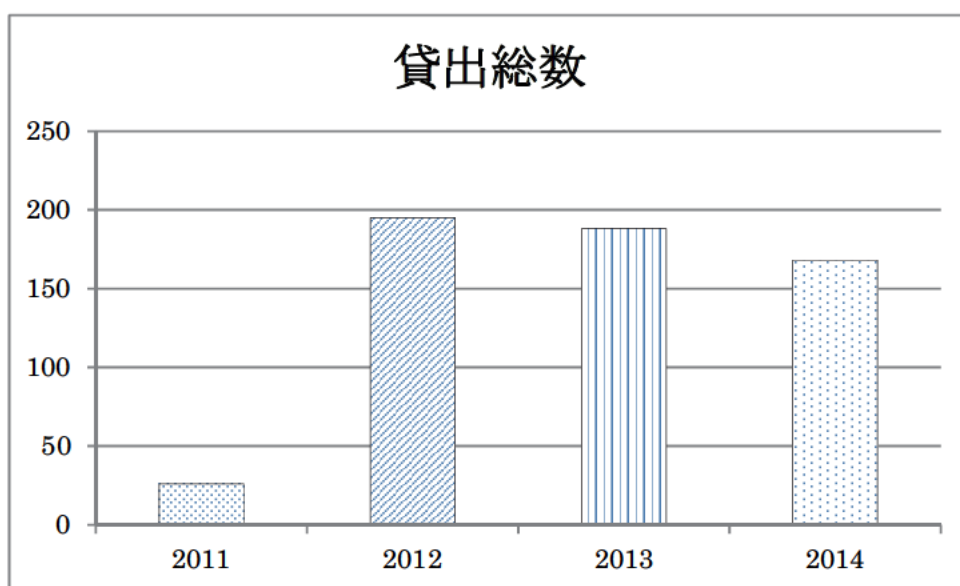
1 位 『いつかロロサエの森で』

2 位 『グラミン銀行を知っていますか』

3 位 『ジェンダーと国際教育開発』

洋書 1 位 『Roadmap to 1325: resolution for gender sensitive peace and security policies』

2011 年～2014 年（2 月末まで）貸出状況



10.2 ホームページを通じた情報発信

センター・ホームページは、センターが主催・協力する各種イベントの学内外への通知・案内と活動報告を中心に年間約 50 件の情報を掲載している。各種イベントの報告は「共に生きる」スタディグループ・メンバーをはじめとするイベント参加学生が執筆した。活動報告のうち約 15 件は英訳記事として英語ホームページに掲載した。

また、印刷・製本・公開した報告書はすべてホームページ上からダウンロードして読むことができるようにして、センターからの情報発信に努めた。

III. 資料

ジェンダー・センシティブな視点からみたルワンダ・ガチャチャ裁判

人間文化創成科学研究科

ジェンダー社会科学専攻 M2 中村千鶴

(要約)

東アフリカに位置し、「千の丘の国」と呼ばれるルワンダ共和国は 1994 年に悲劇的なジェノサイドを経験した。新政権はコミュニティ・レベルの民衆司法である「ガチャチャ裁判」を法制度化によって導入し、国民に参加を義務づけた。コミュニティに着目したガチャチャ裁判は、世界的に見ても移行期正義の手法としては唯一無二の取り組みであるが、ジェンダー・センシティブな先行研究は少ない。本調査の目的は、ガチャチャ裁判の実行過程を、特にジェンダーの視点から把握・考察することである。調査地域は首都キガリと南部州フエ県である。

ジェノサイド直後、ルワンダ政府はジェンダーに基づく暴力（Gender Based Violence: GBV）を極めて深刻なジェノサイド罪として認めた。よって GBV は、ルワンダ国際刑事裁判所（International Criminal Tribunal for Rwanda: ICTR）および国内裁判所の管轄とされたが、2008 年の法改正によって、ガチャチャ裁判で扱われることになった。

本調査では、以下の 2 点を検討した。GBV ケースはガチャチャ裁判でどのような形式で審理され、そのメリットとデメリットは何だったのか。また、ガチャチャ裁判は女性たちにどのような影響をもたらしたのか。調査を進める中で、2 つの注目すべき点が見られた。第 1 に、ジェノサイド後、女性たちが証言者や判事として、多様な形でガチャチャ裁判へ参加していたことだ。第 2 に、ガチャチャ裁判において、GBV ケースが例外的に非公開形式で審理されていたことである。

考察では、GBV ケースの審理における非公開形式の採用は、裁判の迅速化を可能にしたが、被害者がコミュニティで被害を公表することの困難は払拭されなかったと結論づけた。また、ガチャチャ裁判に参加することで女性たちは社会における新たな機会を獲得したが、それとルワンダにおけるジェンダー主流化との因果関係については、さらなる調査を要する。



Avega South 事務所



ンゴマ初等裁判所（左）と Avega South

ルワンダ東部農村地域における妊娠可能年齢女性の栄養状態と食物へのアクセス

人間文化創成科学研究科

ライフサイエンス専攻 M1 柳沢あゆみ

(要約)

アフリカ全土が抱える問題として、食糧不足に起因する低栄養がある。さらに伝統的に男性優位な社会であるアフリカ諸国においては「貧困の女性化 (feminization of poverty)」の言葉が存在するように、貧困人口の 3 分の 2 は女性であり、貧困とジェンダー格差に苦しむ女性が多く存在する。

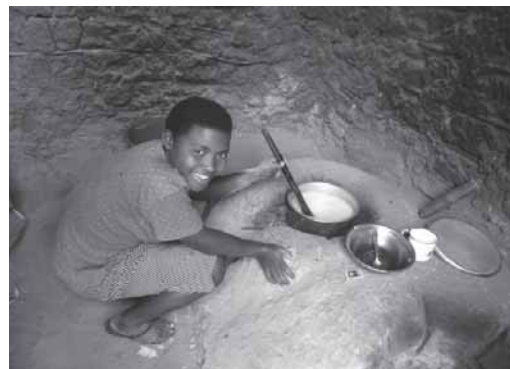
ルワンダ共和国は、1994 年の民族間の大虐殺以来、目覚ましい経済発展を遂げると同時に、国家政策におけるジェンダー主流化（ジェンダー平等を達成するための手段で、あらゆる政策にジェンダーの視点を取り入れること）が目覚ましい国である。しかし一方で、いまだ農村部においては、きれいな水や栄養のある食物など生きていくうえで必要な最低限の物資も不足しているのが現状であり、女性への性差別が残っていることが予測される。

本研究は、2014 年 8 月にルワンダ東部農村地域において、18–49 歳の成人男女を対象に、身体測定と食物摂取頻度調査を行い、同地域における妊娠可能な年齢の女性の栄養状態と食物へのアクセスを調査した。

身体測定の結果では BMI18.5 未満である慢性エネルギー欠乏者や BMI30.0 以上の肥満者の割合は男女ともに少なく、長期栄養状態において男女間に有意差はなかった。食物摂取頻度調査では、調査票に記載されている 18 品目の食事や料理のうち、Sorghum alcohol、Avocado、Soup/Sauce with beans の 3 品目において摂取頻度に男女間で有意差が出た ($p<0.05$)。これら 3 食品の摂取頻度の違いが、男女の栄養素摂取量の差異に影響を及ぼしている要因の一つではないかと考えられるが、他の要因も影響していると考えられる。



FFQ を行っている様子



Porridge を作っている様子

フランス、アルザス地方におけるイスラーム空間の創出 —ストラスブール・大モスク建設を事例に—

人間文化創成科学研究科
ジェンダー社会科学専攻 M2 佐藤香寿実

(要約)

近年フランスでは、公共空間でのスカーフ着用やモスク不足による街頭での集団礼拝が世俗主義に抵触するとされ、政教分離原則ライシテと「聖俗不可分なイスラーム」との対立が、メディアや政治の場で盛んに取り上げられてきた。一方、フランス北東部のアルザス地方は、独仏によって所有を争われ、19世紀以降四度も帰属が変化し、そのたびに同化（国民化）を強いられた歴史を持つ。その歴史ゆえ、例外的にライシテの法的基盤である政教分離法（1905年制定）が適用されておらず、独自の地方法のもとで、他地域とは異なる政教関係が存在する。本研究は、このアルザス地方に着目し、ローカルレベルでイスラーム空間がどのように創られ、利用されているかを明らかにすることで、世俗主義と自由なイスラーム実践の共存可能性を探ることを目的とした。本報告は、特に、2012年に市や公共団体からの援助を受けて建設されたストラスブール・大モスクの建設過程と利用状況を探るため、2014年8月30日から9月28日までの約1か月間にわたって実施した現地調査の報告書である。参与観察とインタビューに基づく調査の成果として、ストラスブール市におけるイスラーム空間の多様性が浮き彫りになった他、ストラスブール・大モスクの建設過程において宗教間協力が促進される一方で諸アクター間の対立関係も存在していたこと、このモスクが新しいイスラームイメージの構築に貢献していることが明らかになった。



ストラスブール・大モスクの入口



男性用礼拝スペース（1階）



Application of Microwave Technology to Extraction of Essential Oils from Natural Plant Products of Afghanistan

o Nazifa FAQERYAR, Yoshihito MORI, Takeko MATSUMURA^a
Ochanomizu University, ^aMinerva Light Lab.



Afghanistan has many kind of volatile-oil-rich and not-fully-utilized flora. These oils are extracted using conventional methods which have disadvantages of long extraction time, poor quality products and low extraction yield, our proposal is to extract the essential oil of common Afghan spices using microwave technology to improve extracted oil yield and quality and decrease the extraction time. Different kinds of material are discussed for making an extraction reactor.

Introduction

Volatile or essential oils are volatile in steam. They differ entirely in both chemical and physical properties from fixed. They secreted in oil cells, secretion ducts and cavities, or glandular hairs.

They are frequently associated with other substances such as gums, resins and themselves tend to be resinous on exposure to air.

Problem in Afghanistan

Afghanistan has many kind of volatile-oil-rich and not-fully-utilized flora. These oils are extracted using conventional methods (solvent extraction) and steam distillation but no analyzing methods is used still in our country.

Some perfume companies are started to extract essential oils of rose flowers using steam distillation from 10 years ago in Afghanistan. These industries buy flowers from farmers and extracted through long time steam distillation. And the distillery can't use fresh samples.

4500 Kg fresh rose flowers use to extract just one Kilogram Essential oils.



Objectives

1. To develop a rapid and economic method for microwave extraction of essential oils from some common Afghan spices using microwave energy.
2. To determine the essential oil contents.
3. To analysis the major constituent of extracted essential oils.

Research questions

1. How long it takes to extract the essential oil from spices using microwave energy?
2. How much is the yield percentages of essential oils in Afghan flora spices?
3. What is the composition of the essential oils in Afghan flora spices?
4. How can we use these applied methods widely and easily in Afghanistan?

Methods of extraction

- ✓ Water Distillation
- ✓ Steam Distillation
- ✓ Solvent Extraction (Sohxlet)

Disadvantages of custom methods

- Plant security problems
- Emissions of volatile organic compounds into atmosphere
- High operation costs
- Poor quality products caused by high processing temperatures
- Low extraction yield
- High number of processing steps



Microwave extraction

Modern instrumental techniques play an indispensable role in extraction of essential oils. The microwave power can be applied then for extracting of essential oils from natural plants products.

Advantages of Microwave Extraction Technology

- ✓ Improvement of extracted oil yield and quality
- ✓ Direct extraction capability
- ✓ Lower energy consumption
- ✓ Faster processing time
- ✓ Reduced solvent levels

Research plan

1. Separation method for essential oils
- Microwave technology

The optimization of the separation conditions is required about each product and this is the main part in this plan.

2. The optimization is made by monitoring chemical composition of the separated oil
- Chromatographic methods such as:

- ✓ Thin-layer chromatography
- ✓ High-performance liquid chromatography
- ✓ Gas chromatography
- ✓ Spectroscopic methods

The methodology including separation methods, chemical composition analytical methods and apparatus should be chosen to continue to employ in the Afghan social situation.

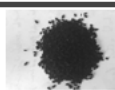
Flurinated polymers made reactor

Quartz-made reactors have been widely used as a vessel in microwave researches but a few researches have done using PTFE, PFM and TFM vessels. Low dielectric constant properties of fluorinated polymers made them essentially transparent at 2.45 MHz and are economically suitable.

We try to discuss the possibility of using different reactors made of polymers.

Choosing medicinal plants

According to Chafique Younos et al (1987), 215 medicinal plants have been identified in Afghanistan. Among these 153 are cultivated or grown wild and 62 of these plants are imported. Here I have made three tables from cultivated and wild grown medicinal plants of Afghanistan contain essential oils. 61 of these plants extracted using conventional methods, 24 of them extracted using different microwaves extraction techniques and 21 of them haven't been extracted yet but some species of same family extracted before in other countries. Tab 1, 2, 3.



Tab 2. Extracted essential oils from medicinal plants of Afghanistan using Microwave & conventional methods.

No.	Native name in Afghanistan	Botanical name	Family name	part used	Extraction Method	Oil yield %
1	پستیا	Pistacia Vera L.	Anacardiaceae	Fruit	SD	98.3
2	کندک	Cannabis Sativa L.	Cannabaceae	Leaves	ME	87.5
3	آرتیسان	Artemisia Absinthium L.	Compositae	Flowers	SD/ME	72-94
4	کندک	Cardianthus Tinctoria L.	Compositae	Flowers	SD	89.7
5	کندک	Martaria Chamonilla L.	Compositae	Flowers	SD	80.76
6	کندک	Juniperus Euxora Bieb.	Cupressaceae	Flowers	SD/ME	97.2
7	کندک	Croci Sativa	Iridaceae	Stigma	SD	81.82
8	کندک	Mentha Longifolia (L.) Huds.	Lamiaceae	Leaves	MAE	99.91
9	کندک	Mentha Piperita L.	Lamiaceae	Leaves	MAE	99.91
10	کندک	Ocimum Basilicum L.	Lamiaceae	Leaves	SD/ME	99.91
11	کندک	Stachys Lavandulifolia Vahl.	Lamiaceae	Leaves	SD/ME	89.6
12	کندک	Lawsonia Inermis Roth.	Lythraceae	Leaves	MAHD	80.4
13	کندک	Papaver Somniferum L. Var. aff. papaveraceum	Papaveraceae	seeds	SPME	?
14	کندک	Nigella Sativa L.	Ranunculaceae	seeds	SD	MSD

* Thymus vulgaris



Tab 1. Extracted essential oils from medicinal plants of Afghanistan using conventional methods.

No.	Native name in Afghanistan	Botanical name	Family name	part used	Extraction Method	Oil yield %
1	کندک	Adiantum Capillare-Veneris L.	Adiantaceae	Leaves	SD	?
2	کندک	Aerva Javanica (Burm.f.) Spreng.	Adiantaceae	Leaves	Dry SD	82.96
3	کندک	Pistacia Chingii Stocks.	Anacardiaceae	Leaves	SD	78.92
4	کندک	Theridion nerifolia Juss.	Apocynaceae	Stem	SD	96.14, 96.6
5	کندک	Eichium Anomum L.	Betulaceae	Flowers	SD	84.1
6	کندک	Cappari Syniosa L.	Capparidaceae	Aerial part	SD	77.63
7	کندک	Lourea Caprifolia DC.	Cuniflora	Flowers	SD	93.92
8	کندک	Achillea Satureia L.	Compositae	Aerial part	SD	85.1
9	کندک	Anacyclus Pyrethrum L.	Compositae	Root	SD	91.42
10	کندک	Artemisia Alba L.	Compositae	Aerial part	SD	91.25
11	کندک	Centauria Behen L.	Compositae	Aerial part	SD	93.7
12	کندک	Chrysanthemum Parthenium Pers.	Compositae	Flowers	SD	98.9
13	کندک	Cichorium Inybu	Compositae	Aerial part	SD	?
14	کندک	Doreenium Parlatichens L.	Compositae	Aerial part	SD	97.8
15	کندک	Imula Hirsuta L.	Compositae	Roots	SD	91.5
16	کندک	Lactuca Sativa L.	Compositae	Seeds	SD	81.07, 78.88
17	کندک	Brassica Hirta Mornch.	Cruciferae	Seed	SD	95.36

HD Hydro Distillation
SD Steam Distillation
ME Microwave Extraction
SPME Solvent Free Microwave Extraction
MAE Microwave Assisted Extraction
MAHD Microwave Assisted Hydro Distillation
MSD Microwave Steam Distillation
MASE Microwave Assisted Steam Distillation
MAHT Microwave Assisted Hydro Thermal
MD/SPME Microwave Distillation/Solid Phase Microextraction

Tab 3. Unextracted Afghanistan medicinal plants

No.	Native name in Afghanistan	Botanical name	Family name	parts used	Extraction Method	Oil yield %
1	کندک	Adiantum Capillare Stocks.	Anacardiaceae	?	?	?
2	کندک	Artemisia Cina Berg.	Compositae	?	?	?
3	کندک	Martaria Dicotyles DC.	Compositae	?	?	?
4	کندک	Siaynbrium Sophia L.	Cruciferae	?	?	?
5	کندک	Ephedra Cilata Fisch. Mey.	Ephedraceae	?	?	?
6	کندک	Ephedra Gerardiana Vahl. Steud.	Ephedraceae	?	?	?
7	کندک	Ephedra Intermedia Schrenk et C.A. Mey. Var. Tibetica Steud.	Ephedraceae	?	?	?
8	کندک	Ephedra Intermedia Schrenk et C.A. Mey. Var. Intermedia	Ephedraceae	?	?	?
9	کندک	Ephedra Pocytyclada Steud.	Ephedraceae	?	?	?
10	کندک	Ephedra Procera Fisch. Mey.	Ephedraceae	?	?	?
11	کندک	Ephedra Sarcocarpa Alech. Fendler	Ephedraceae	?	?	?
12	کندک	Marsiphan Alnus Benth.	Lamiaceae	?	?	?
13	کندک	Nepeta Microthia Bunge.	Lamiaceae	?	?	?
14	کندک	Oenanthe Cilicicum Rech.f.	Lamiaceae	?	?	?
15	کندک	Thymus Afghanistan Rech.f.	Lamiaceae	?	?	?
16	کندک	Ziziphora Afghanistan Rech.f.	Lamiaceae	?	?	?
17	کندک	Rumex Congomeratus Murray.	Polygonaceae	?	?	?
18	کندک	Zizyphus Vulgaris Lam.	Rhamnaceae	?	?	?
19	کندک	Verbascum ciliolobus Benth.	Scrophulariaceae	?	?	?
20	کندک	Withania Sonifera Dunal.	Solanaceae	?	?	?

* Other kinds of the same family extracted and this prove that these plants contain essential oils so we would like to chose some of these preferably.

Acknowledgment

This work is supported by Project for the Promotion and enhancement of the Afghan Capacity for Effective Development (PEACE) conducted by Japanese International Cooperation Agency (JICA). And special thanks to Prof. Azuma of Osaka university for his advice regarding our research plan.

Reference

- [1] William C. et al. (2007)
- [2] Azadmard-Damirchiet al (2011)
- [3] P. Pollen et al (1998)
- [4] Luque de Castro et al (1999)
- [5] M. Gallo et al. (2010)
- [6] C. Proestos, M. Komaitis, (2007)
- [7] <http://www.sampleprep.duq.edu/dir/mwwavechap16/mwave.htm>

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—
平成 26（2014）年度 実施報告書

2015 年 3 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター発行

〒112 8610 東京都文京区大塚 2 1 1

Tel&Fax : 03 5978 5546

Email : info_cwed@cc.ocha.ac.jp
